転生者サバイバル

sin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生者サバイバル

【Ｎコード】
Ｎ８６２３Ｘ

【作者名】
ｓｉｎ

【あらすじ】
とあるフラグ建築士の高校生が兄離れできない引っ込み思案な弟に彼女ができました～といったら刺された。
そうなるよう仕組んだのが神様で、無理やり転生者同士の戦いに参加させられる。
原作知識０の主人公は、知らないうちに原作に介入していた。

諸悪の根源は（前書き）

息抜き作品が初投稿とはこれ如何に。
メインがまだ投稿できてないぞ！なにやってんの！？　と脳内会議
とりあえず適当に打ってたら書き上げてたので投稿。
どうでもいいや

まぁゆっくりしてけよ

諸悪の根源は

「ここはどこだ……？」
俺は確か弟に刺されてしんだはずだ。　なのに俺の体には傷ひとつもない。

「やあやあ、ご機嫌いかがかな～？」
「…っ！　誰だっ！！！」
殺風景な空間に突然背後から声をかけられた。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよー。　全く何かいいことでもあったのかい？」
「……お前は誰だといっている。」
「ほいほーい。　じゃあ僕が誰か、だったね。　んーとね～ぇ、ぼくはぁ～、神様だぞ～」
「なに馬鹿なこと言っている。　真面目に答えろ」
「酷いなぁほんとのことだよ、というかノリ悪いな、君ぃ」
「神などいない」
「それは勝手な決め付けだよ。神はいるし、いない。　まぁ人間に力を貸す神なんて少ないからね。　ほら、次の質問いってみよ～」
「……死んだ人間は俺のように神と話すのか？」
「んなわけないじゃん（笑）そんなことしたら過労死しちゃうよ」
「……いちいちむかつくやつだな」
「あ、怒った？ねぇ怒ったぁ？」
こいつ殺してえ
「じゃあ、俺になんのようだ？」
「あら、スルーですぅ？　んーとねぇ神様にもいろいろあってねえ。ラグナロク起こしたくない神様達が最高神を選ぶ為に考え出した戦争に出てもらうためだよ。」

「断る」
「おまえの拒否権ねぇから～　あひゃひゃひゃひゃひゃ」
油断したら突然ウザくなった。　やっぱ殺してえ。
「どうして俺なんだ。　勝ちたいなら戦闘経験あるやつ連れてくればよかっただろ」
「なんとなくに決まってるだろ。　別に勝ちたいってわけじゃないし～」
断ったりしたら他のやつらになめられるんだよね～、などといいながらこいつは言いやがった。
「まぁいいや、君、二次小説とか読んだことない？　ようはあれの転生者ってことなんだけど」
「ない。　俺は携帯もパソコンも持ってない。　弟は持っていたが」
「そっかー、せつめいめんどぉ～」
「出るしかないなら聞いてやる。　さっさと言え」
「そうだね、じゃあ、ひとぉ～つ。　あなたは私に殺されましたぁ。
ふたぁ～つ。　代わりにアニメや漫画、ゲームの世界に転生させてやるからゆるしてちょ？
みぃ～つ。　と、いうのは建前で自分の送った転生者が他の神が送り込んだ転生者の殺した数で神の権力が決まる。　ってことだよ」
「つまり代理戦争か」
「そうそうそれそれ」
「俺に殺し合いをしろということか？」
「うん、そうだね」
「拒否権は
「お前のきょ（ｒｙ」判った」

「へ～ぇ。　随分とあっさりしてるんだね。　もっと悩んでもいいんじゃない？」
「ガンツ見たいな感じだろ？　お前は死んだからってとことか」
「狂ってやがるなぁ～」
「お前がな。　死ね。　どうせ断れないんだろうが。」
「おお、怖い怖い。　っとと、転生者にはなにか特典ってのつけなきゃなんだよ。　一人３つまで」
「何でもいいのか？」
「基本的に神殺しができるのは駄目かな。　流出とか」
「他の転生者と能力が被った場合どうなる」
「選び直しかな。　仮面ライダーディケイドばっかり登場する仮面ライダーはつまらないだろ？」
「他の転生者が何を選んだかわかるか？」
「それは特典を使えば判るよ」
「そうか、ならいい」
「ほら、きめてくれよ。　実はあと5時間しかないんだから」

「キングストーンを俺に移植してくれ、太陽の石だ」
「仮面ライダーブラックサンかい？　チートライダーってやつだね。バイオライダーにはいつか変身できるからね」
「次だ、次元連結システムを俺の胸の右側に埋め込んでそれを心臓の変わりにしてくれ」
「プロジェクトゼオライマーかーまたまたチートじゃねぇの？」

「なあ、どこに転生するか教えてもらえるか？」
「んー？　言ってなかったっけ？　なのはだよ」
「知らない」
「えー？　有名なのに？」

「知らん」
「わーい。　原作知識０だーつかえねー」
「最後だ」
「え、スルー？」
「木原マサキの経験、能力、すべてくれ」
「おや？　割と控えめだね。それでいいのかい？」
「問題ない」
「そんな装備で大丈夫か？」
　黙れ味噌っかす

「全部言ったぞさっさと連れてけ」
「向こうの転生者はキモいやつ多めだからきをつけてね～」
「……ッ！！！！！！」
　突然地面に穴が開いた。　当然俺は落ちるわけで。
「はいはい、テンプレテンプレ（笑）　他の転生者はニコポ、ナデポばっか要求してんだろ～な～。　よーしそれじゃ、生まれる場所の指定だったね。　うん、記憶と経験の引継ぎついでに木原マサキのクローンとして生まれさせてやろうかな。　木原マサキがその世界にいたことになってしまうけど、禁止とは聞かされてないし大丈夫でしょー」

「まあ、僕の為にせいぜい足掻いてよ。　ヤンデレに好かれすぎて殺された転生者さん？　弟が兄貴のことを好きすぎて生きるのがつらい状態だったことを知らなかったんだろーな。　まあ、僕のせいだけど」

諸悪の根源は（後書き）

さて、神様の出番終了のお知らせ
こういうやつを最後に喋らすのが好きっぽい作者。

まぁこれ以上のチートはもうでないかな？
ブラックサンはパンチで地球壊せるし。　シャドウムーンにできること全部できるし
次元連結システムで魔法を使わずアルハザードに跳んだりポソンジャンプっぽいことできるし。

つーかどっちか１つでも十分反則だなー
ゼオライマーはＩＳやガンダムなんかの対策に使います

グランゾンに余裕で勝てる気がするから怖い。
冥王様を登場させます

冥王様のクローン（前書き）

転生者そっちのけで冥王様に家族愛を教える主人公
ちょっと無茶な設定にしすぎたっぽい

冥王様のクローン

神の代理戦争なんかに付き合わされた俺はとんでもないことに気付いた。

――――転生したら赤ん坊からじゃね？

やばい、母乳吸うとか健全な高校生には荷が重過ぎるぞ。

「ようやく完成か。　ふん、思ったより遅かったな」

え？

「起きろ」

いきなり蹴られた。　子供に何てことしやがるんだこいつ！！

「さっさと起きろガラクタ」

赤ん坊が動けるわけがないだろ

「あれ？動く？」

「何を言っている。　それでも俺か？まさか失敗？いや記憶をまだ移してなかったな」

「俺？貴様、俺に何をした。」

「ちっ、説明せずともわかるだろう。　貴様は俺。　俺のクローンだ」

「クローンは寿命が短くなるんじゃなかったのか？」

「ふん、そんなもの成長するシリコンに俺の遺伝子を組み込み記憶をコピーすればそれであとはどうとでもなる」

とんでもないことする男だ。　というかこの声といい、この言動といいこいつはまさか

「記憶を？　そんなものは俺にはないぞ？」

「今からその工程に移る。　さっさとついて来い」
「いまから貴様に記憶をコピーするついでに改造してやる」
「改造だと？　危険ではないのか？」
「ふん、失敗したならばやり直せばいいだけだ。　肉体が破損しても次元連結システムのちょっとした応用で再生できる。　では、始めるぞ」
「おい！ちょっと待て！！」
「黙れ」

ブシュウーーー
「っく催眠ガスか！？」
「麻酔だ。　おとなしくしてろ」
ああ、間違いない。　こいつ木原マサキだ……

俺の中に木原マサキの記憶と経験が流れ込んでくる。
この木原マサキには冥王計画を立てていないようだし、まだゼオライマーも作ってはいなかった。
木原マサキは元々アルハザードの住民のようで、アルハザードの秘術とこれまでも俺にやっているように自分の完璧なクローンを作り延命していたようだ。
秘術には限界が来たようで途中からはクローンに切り替えているようだが。
マモーみたいだと思ったがあれは確か遺伝子が劣化してしまっていた。　実際そのとおりになっている

しかし、この代の木原は次元連結システムを完成させその遺伝子を復元させた。
その遺伝子を使い俺を造ったようだ。　しかも次元連結システムやキングストーンの移植により寿命がありえないほど長くなっているのがなんとなくわかる。

木原の記憶にはいろいろなものがあった。　聖王のゆりかごにわざとゴミ性能護衛機を作ったり、夜天の書というものを作ったり、キングストーンを暗黒結社とかいうやつらと奪い合ったり、ＪＳというやつを助手にして技術を教えたりといったことだ。

木原は冥王計画自体作っていないようだ。

木原マサキのすべてが俺の中に流れ込み終わった
精神的に疲れた……

「終わったぞ、いつまで寝ているつもりだ。　まだ引継ぎが終了していないだろう」
「わかっている。　蹴るんじゃない」
こいつまた蹴りやがった。　見た目１歳児に何てことしやがる。

「もたもたするなガラクタ。　性能実験に行くぞ」
「ああ、一番強度のある部屋でいいんだろう？」
「わかっているなら早く跳べ。　貴様には完成させた次元連結システムを組み込んである」

「ここか、俺の記憶よりも少し大きいな」
「ああ、貴様の性能は従来よりも高くなっているからな。　それに貴様の寿命は後５万年以上はある」

「なに……？　そんな事は可能なのか？　アルハザードの秘術でさえ１０００年の延命が限度というのに」
「貴様に次元連結システムとは別にキングストーンを植え込んだ。冥府の王にはお似合いの名前の石だな――太陽の石というらしい、他のキングストーンは全て破壊した。　そんなものがあっても危険だからな。　特に月の石、あれは太陽の石と対になっているようだが、その二つを手に入れたものは世界の王になれるらしいが、俺は世界の王など興味ないのでな」

それはよかったのか？
ブラックに対抗できるやつがディケイドくらいしか思いつかない。だがあいつにはキングストーンを持っていないから奇跡を起こすことができないだろうし
もし過去に行ってもブラックも過去に跳ぶことができるからな。

それにしてもこいつ……
「おい」
「何だガラクタ」
「冥府の王とは何だ？　世界の王には興味がないんじゃないのか」
「ないさ。　わからないのか？　俺の最高傑作、次元連結システムがどんな目的で作られたかを」
「それが冥府の王だとでも？」
「ああ、夜天の書はある意味失敗作だからな。　兵器に感情など要らぬというのに」
「貴様は……いや、いい」

――――――――違う

こいつの目的とオリジナルの目的が食い違っている。
オリジナルは愛を求め、夜天の書というユニゾンデバイスをつくり、家族として生活し、愛を知った。
ユニゾンデバイスを狙ったやつの襲撃にあい、寿命が近づいてたオリジナルはあっけなく敗北。
守護騎士が決死の覚悟で木原を逃がし、何とか生き延びた。
最後にオリジナルは叫び誓った
――――――必ず取り返す！！必ず迎えに行く！！！！俺の所有物を！！！！！！！

だが、このマサキはＯＶＡ版のマサキのような感じだ。
愛を拒み、知らず、人の感情を熟知した上で弄ぶ。
木原は愛を説かれ、拒絶し、心が死んでしまった。
それ故に死ぬはずだったマサトに人格を奪われた。

このマサキに本当の目的を教えたりしたらこいつも発狂してしまうだろう。

「始めるぞ、まずは出力を調べよう」

「性能はやはり予想を上回ったな。　貴様に勝てるものなどいないだろうな」
「当然だろう」
「「この俺の最高傑作なのだから」」

子供の声と被るとほほえましくなるが残念ながらこの光景をみてもそういえるだろうか。
最硬の部屋は破壊され、あたりは炎上し、次元断層が発生し、小さな虚数空間ができている。

実は次元断層の原因が自分で、その中心にいたため虚数空間に堕ちてしまったのだが、次元連結システムの応用で何とか戻って来れた。
これを最高傑作といわずしてなんといおうか。
思わず二人で高笑い。
大人の低い声と子供の高めの声で笑う
くっくっくっふはっはっはアーッ八八ハッハーッ八ッ八ッハッハ

落ち着くのに暫く時間がかかった。
その間に次元連結システムによって部屋や次元断層は修復している

「ふん、これで俺の役目はもう終わったな」
「終わっただと？　どういうことだ」
「言葉通りの意味だ。　俺にはもう生きる意味がないということだ」
突然馬鹿なことを言い出した。
木原はもっと自由なやつだったはずだ。
「次元連結システムを完成させ、貴様という後継者を造った。だからもう目的がない」
「……冥府の王とやらになるんじゃないのか」
「次元連結システムを完成させ、貴様ができた時点でその目的は完遂されたと認識した」
「俺は冥府の王になるつもりなどないぞ」
「ふん。　俺は誰の指図も受けない。　貴様もそうだろうが」
「ああ、そうだ。　だが、頼みがある」
「……俺は誰の指図も受けないといった」

「どうせ死ぬつもりなのだろう？」
ならば、こいつにも愛を知ってもらおう。
家族の愛を。
オリジナルが知ることができたのだ、こいつにもできないわけがない。

「……いってみろ」
「他の人間と同じように暮らしたい」
「俺にも同じようにしろとでも言うつもりか・・・？」
「そういうことだ」
「何を言うかと思えば。　そんなくだらないことを」
「他に目的がないのだろう。　ならば老衰していけ」
「断る」

強情なやつだ、なんとなくこいつには生きてもらいたいのだ。
ここで死なせるわけにはいかない。
俺の取った行動は

「目的がなければ生きていけないとはガラクタ同然だな」

挑発だった。　しかもかなり安い

「なに……？　ガラクタ風情が造物主にそのような口をきくとはな」

乗った！？
自尊心が結構でかいのか？

「貴様はガラクタだろう。　与えられた目的を終わらせたら、生きる意味を失うとは。　使い捨てのガラクタみたいだ……ふん、本

当の目的を見失った貴様はずいぶん性能の悪いガラクタなんだな」
「……貴様ァ！！！！」
「勝てるのか？　貴様に。　この俺を倒せるか？　ガラクタでないと俺に証明して見せろ」
「……ッ」
「どうした？　その程度のこともできないのか、ガラクタ。　目的を与えてやる。　寿命が尽きるまで生きろ。　まさかこれができないわけないよな？」

「いいだろう、生きていてやる。　……勘違いするんじゃないぞ、貴様の口車に乗ったわけでも指図を受けるわけでもない。　その見え見えの挑発に乗ってやる。　感謝しろ」

「ふ、そうか。　ありがとう」
「……な！　く、そ。　き、きさま、なにを・・・！？」
冥王様がツンデれった。
感謝されるのに慣れてないんだろう。

「……貴様は俺とはだいぶ違うようだな」
「ああ、オリジナルに限りなく近いからな」
「そうか、オリジナルは貴様のようなやつだったのだな」
「多分、違うと思うがな」
「……？」
「口調は同じ、考えも似たようなものだが、俺は俺の考えを持っている」
「そんなものか」
「ああ、そんなものだ」

これで、第一歩、進んだだろう。

他の転生者もいるらしいが関らなければいい。

冥王様のクローン（後書き）

冥王様：ツンデレ、傲慢不遜、唯我独尊。
転生者に絡まれたらとりあえず、（天）で消滅させとく
平行世界の冥王様は意外と優しい性格
ＪＳに週３で奢っていた

無駄設定その一、一応主人公は学校では猫被りさせておく

家族計画第一歩…初めての入学式（前書き）

ここから原作の何年か前まで少しづつ飛ばします
恭也は原作時１９歳で大学生、美由紀は１７歳で高校生、なのは
は小学校３年生で
なのは５歳の時に士郎入院だったと思うので原作の６年前、恭也
と同じ中学に入学します
流石に御神のシスコンも中学には行ってるだろうと自己解釈でせう
あれ？外国にいたのはトラハだよな？

家族計画第一歩…初めての入学式

木原マサキに家族愛を思い出してもらうそのために、俺は計画を立てた。
とある小説にあった、なごやか家族作戦。
たしか、世界を滅ぼされないように家族愛を知ってもらう作戦だったと思う
今は2人だがまあ、これも家族だろう。

「貴様には俺の父親になってもらう」
「親に？　何故だ」
「年が離れすぎている。　それに俺は今1歳児の見た目だ。　一人で行動できる年ではない」
「……面倒だ」
「お前が俺を早く起こすから悪いんだ。　どうせ長生きするのだから10歳ごろに起こせばよかったものを」
「ッチ」
「それでは地球に行こう」
「どこだそれは」
「魔法文化が一般公開されていない世界だ。　次元連結システムとオリジナルの記憶から引っ張り出せばいけるところだ。　魔法世界なんてごめんだ、俺達の目的は普通に生きることだからな」
「ふん」
「どこに行く」
「地球とやらに行くのだろう、研究所を持っていきたいのでな」
「……随分素直だな」
「何もすることがないからな」
「くくく、そうか」
「……」

次元連結システムによって地球の海鳴市というところに転移した俺達は山奥に研究所を移して結界をはり、ここを本拠地とすることにした。

木原と俺のハッキングで戸籍を偽造し、金は木原に稼がせる。
バイトぐらいならできるだろうと、木原にそういうと
「俺は好きなようにやらせてもらう」
といい、情報屋をやりだした。

名前も木原ではなく氷室と変え、俺は秋津マサトと名乗った

そして3年後には、思ったより成長するシリコンの成長速度が速く、既に13歳程の見た目になっていた。
金は木原がどこからか調達してくる。

木原は飯を栄養剤だけで済ませていた。
ここも、オリジナルと違う。
オリジナルはシャマルに料理を教えるほど家族と食べる手料理を大切にしていた。

当然俺もそうだ。
弟と当番制で料理をしていた。
木原に料理を教えようと思ったがあいつはいつも逃げる。

海鳴市には最近容姿が無駄に整っているやつが現れる。
銀髪オッドアイは当たり前、こいつ等はある一定以下の容姿の持ち主を惹きつけている。
どのくらいかというと普通以下ぐらいの容姿を持った女に特に好かれている。
顔はいいが性格が完全にアウトだろう。
当然やつらはそれ以外のやつに嫌われていたりする。

ただ、転生の特典によって強いと警戒していたのだが、似たような容姿を持ったやつ同士で殺し合いしてたが、戦闘はまるっきり素人だったし、かなり弱かった。
ｆａｔｅのギルガメッシュの容姿のやつはギルガメッシュの宝具を持っていて、アーチャーやランサー、仮面ライダー剣といったやつらをまとめて殺害していった。
その後、ナイフを持った優男が宝具を切り裂き消滅させ一突きで殺しているやつもいた

こいつ等には、忌避感がないのだろうか？
人殺しに躊躇いがなかった。
狂っているとしか言いようがない。
やはり関らないに限るな。

そして１０年後、俺が生まれてから１３年たったある日

木原と一緒に新たな家族を作ることにした

名前は氷室美玖
戦闘には参加できないが、普通の人間より少しだけ強い。
料理係である

あの男、俺が学校に行きたいと言ったら昼飯作らせるために作りやがった
ガラクタと呼んで美玖を苛めていたこともあったがすぐにやめさせた。
家族をそんな名前で呼んじゃいけない。

中学に入学することにした俺は家事を美玖に任せてある
美玖は最初から小学生高学年ほどの身長があるので、安心して火を扱わせられる。

入学式には木原に保護者として来て貰った。

「これが、入学式か。　有象無象どもがまるでごみのようだな、消し飛ばしたくなる」
「やめてよ、父さん。　頭おかしい人だと思われちゃうよ」
「何だその喋りかたは」
「学校で貴様などといえるものか、あまり目立ちたくないのでな」
「……そうか」

新入生挨拶はかなり長かった
校長の話はどこも長いものなのだろう

入学式が終わってすることもないので木原の下に行こうとすると、同じ新入生にぶつかってしまった。

「すまない余所見していた、大丈夫か？」
「うん、大丈夫。　僕も急いでたしお互い様だよ」
「俺は高町、高町恭也だ。　お前は？」
「僕は秋津雅人だよ。　」
「同じ新入生同士、まあ、仲良くしてくれ」
「うん。　あ、高町、親のとこ行かないのかい？」
「ああ、そうだな、式が終わったし多分門の前で待っていてくれてるはずだ」
「そっか、じゃあ、少し話さないか？」
「構わない」

「マサト、行くぞ」
「ああ、うん」
「あなたは？」
「そこにいるマサトの父親をしている」
「そうですか……それじゃあ、またな雅人」
「うん。　また」

「……誰だ今のは」
「高町という。　先ほどぶつかったんだが、鍛えてるようだな」
「並みの鍛え方ではなさそうだ」
「だが、俺にぶつかってしまう程度だ。　親と道場で鍛錬を毎日しているそうだが」
「ふん。　親……か」

高町とはこの時出会い、これが原因で高町家と知り合うこととなる。
転生者に絡まれるきっかけとは知らずに……

家族計画第一歩…初めての入学式（後書き）

次話にて氷室ミクの作成……の話は飛ばして、士郎入院
入学式で出会い友と呼び合える仲になった恭也。
学校に滅多に顔を出さなくなり気になり、家に遊びに行くことに
その時、落ち込んだなのはにフラグを立てるために忍び寄る転生者の影

誤字：恭介→恭也

咽び泣く幼女（前書き）

結構無理矢理な理由になってしまった。

咽び泣く幼女

入学式で知り合った高町恭也
この2年間で親友と呼べるような仲になっていた

最近はかなり休んでることがある
初めてできた友達でもあるので気になる

と、いうわけで遊びの約束でもしよう
中学生といえばゲーセンだろうが恭也はそんなタイプには見えない。
無難に家に誘うことにした

「高町、僕の家に遊びに来ないか？」
「……すまん。 最近は忙しいんだ」
「そっか。 最近高町学校休むこと多いから……」
「家の道場で鍛錬をな」
「学校休んでまでかい？」
「……ああ」
「ふーん。 あ、じゃあ高町の家に遊びにいってもいいかな？」
「……鍛錬の見学でもするつもりか？」
「駄目？」
「……いや、いいぞ」

自宅に招くことはできなかったが、恭介の家に行くことになった。
鍛錬……ねぇ
どちらかというと責任感じて逃げてるように見えるけど

「ここだ」
「随分とでかい家だな。」
「そうか？そうでもないと思うが」
「普通の家に道場なんて物があるかよ」
「まあ、ないな」
「そういえば、家族はどうしてる？」
「父さんは入院、母さんは喫茶店でてんてこ舞い、上の妹は喫茶店で手伝いをしてる」
「上の？下の妹が居るのか？」
「ああ、今は公園にいってるんじゃないか？」
「うーん。　妹ちゃん淋しくないのかな？今1人ってことだろ？」
「……大丈夫だ。　なのははいい子だからな。そのくらいどうってことないさ」

いい子か。
小さいのに感心すると同時に
どれだけの不満を抑えこんでいるんだろうかと、心配になった。

「ねぇ、翠屋の手伝いしようか？　忙しいんだろ？」
「それは助かるが……いや、いい。　客にそんな事はさせられん」
「そっか。　そういや、そのなのはちゃんはどこにいるんだ？」
「公園に遊びに行っているんじゃないか？」
「一人で？　うーん」
「む、　どうした」
「高町は知らないのか。　学校でな最近不審者がいるから外出の時は気をつけるようにって連絡があったんだ」
「何？　不審者だと？　……なのはなら大丈夫さ。　なのはは知らない人についていったりはしない」

「ほら、5歳って甘えたがる時期だからさ、　一緒に遊んでやるとかいって誘拐されちゃうかもよ？」
「はあ、どうしてそんなに不安にさせえるようなことを言うんだ。お前は」
「んー？友達の心配して何が悪いんだよ、もしなのはちゃんが誘拐されたら高町は自分を許せなくなるだろうからね」
「俺になのはの迎えに行けと？」
「うん？　俺が行こうか？　高町は鍛錬するんだろ？」
「……すまない、頼む」
「あはは、気にすんなよ。　あ、今度お前の鍛錬につき合わせてくれよ。　それでチャラだからね」
「ああ、わかった。　約束しよう」
「それじゃあ、なのはちゃんと少し一緒にあそんでくるよ」
「いいのか？」
「どうせやることなんてないからね」

なのはちゃんは公園にいるんだったな
あの子供がそうか？
俯いたままベンチに座っている幼女がいた

「おい、お前」
「ふぇ？　え、えと、だ、だれですか？」
「お前が高町なのはか？」
「え、えと、はいそうですけど」

なるほど、確かにいい子だ
少し暗いが

今は１６時、門限は確か１８時までだったと思うからそれまで遊んでやろう。

「恭也に最近物騒だから妹の面倒を見てくれないかといわれてな」
「お兄ちゃんに？でも、なのははいい子だから一人でも平気なの」
「そうか、でも俺は一人で遊びたくないんだ、だから一緒に遊ぼうか」
「え？」
「なんだ、いやなのか？」
「い、いんで、すか？」
「ああ、遊ぼうと俺が誘っているんだ、お前に拒否権などない」
「遊んでくれるの？」
「もちろんだ。　俺がお前の友達になってやる」
「……友達」
「嫌か？」
「…ううん、うれ、しいの」
「そうか」
「いいの？わたしなんかの友達で」
「かまわない」
「うれし、いの」
「そうか」
「お、かしいのうれし、いのに、な、みだとまら、ないよぅ」
「……そうか」
「うえぇ、うううぅぅぅぅ、ひっく、ひ、っく、ぐすっ、う、ううぅぅ」
「ほら、泣け、喚け、そうすれば楽になれる」
「いい、の？」
「ああ、お前は十分いい子だから少しくらいの我儘は許されるさ」
「ふぇ、ふぇぇぇん、うわあああああああん！　ああ〝あ〝あ

あ！！　あああ〝ああ〝っん、ぐすっ、寂しかったよう！辛かったよう！　でも、でも、み〝ん、な、いそがし、ぐすっ、いそ〝がしい、か〝らって、なのはは、うえぇぇ、なの、は、は、いい子、だから、ってだれ、も、あそんでく、れなくて、ひっ〝く、ひっく、すんっ、ずずっ、うう」

子供は余り好きじゃないんだがな
まあ、柄にもないことやってる自覚はあるんだが、

それにしても、兄の知り合いとはいえ初対面の男に抱きついて泣くとはな。
どんだけ我慢してたんだ。
つーか服つかむな、皺になる。
俺の服で鼻水かむな、汚い

あーあーあー
これ近所の人に見られたらどんな噂が立つんだろうか
弟も小さい頃こんな感じだったなー

そんなことを考えながら
なのはとやらが泣き止むのを待った。

だが、そんな時間は俺にはなかったようだ。

「なのはから離れろ！！」

誰だよ

咽び泣く幼女（後書き）

流石に鍛錬見に行くという理由はないかなと思いましたが、この時は鍛錬ばかりやってたみたいなので……

１０歳前後で事故に遭って足の怪我してるのに1日中鍛錬

美由紀は家の手伝い、夜と早朝には参加

友達：一緒に仲良く遊ぶから友達なのか。それとも一緒に遊んでいて楽しいやつを友達と呼ぶのかは寝にはわからない。だってぼっちなんだもん（嘘）

実は5、６人いる。少ないとかゆーな

いつの間にかなっているもの、それが友達。きっかけは何でもいい

現れた俺ＴＵＥＥＥＥ（笑）転生者（前書き）

初戦闘シーン

次元連結システムの再生可能範囲は原子レベルでも残っていれば再生可能だが、次元連結システム本体を破壊されれば主人公の心臓が一つなくなり、再生不可となる

こうしないと死なないからね

現れた俺ＴＵＥＥＥＥ（笑）転生者

なんか変なやつが絡んできた。
つーか、誰だよ

「あん？　誰？　知り合いか？」
「ひっく、ひっく、し、ら、ない、ひと、ひっく」

ですよねー
こいつは大体１３歳ってとこだからもしかして？って思ったんだけど
それはないよな

「そのこから離れろって言ってんだよ！聞こえねえのか！！」

聞こえてるけど脈絡がなさ過ぎる
意味わかんねえ

「あー、はいはい、離れりゃ良いんだろ。　ほら、離れろ」
「や、です……ぐすっ」
「テメェ！俺のなのは泣かせてんじゃねえ！！さっさとどけ！！」

俺のなのは？
ロリコン？
恭也と俺のほぼ同年代だよな、こいつ

「ほら、とりあえず離れろよ。　つーか服皺になんだろーが、放せ」
「うう……ぐすっ、嫌です」

「ふざけんなてめぇ！！なのはから離れろってんだ！！！」
「ひっ」

あっ、力強めやがった。

「おいおい、怖がらせてんじゃねぇよ」
ビビッて服掴む力強くなってんだよ
「うるせぇ！！　てめぇ俺を怒らせてどうなるか解ってんだろうな！？」
「シラネ。　何そんなにきれてんだよ」
「ぶっ殺すッ！！！！！！！！」

すッげえ物騒なやつだな

「来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。『雷の暴風』！！！」
「あぶねぇっ！！」

突然稲妻が俺のいるところに放たれた
当然俺のそばになのはが居る訳で

「ふぇ？」

仕方なくなのはを抱きかかえて横っ飛び

「いきなり何しやがる！」
「俺のなのはにだきついてんじゃねぇ！！光の精霊１７人！集い来りて『魔法の射手・連弾・光の１７矢』！！！」
「っち、おいなのは！逃げろ！！」
「ふぇ？ふぇええ！？い、いきなりなにがおこったの！？」

「だあー！しらねぇよ！！もういい加減離れろ！くっそ、間に合わねぇ！」
「死ねぇぇぇぇぇ！！！！！！！！」

あー、一回死んだなこれ

「っは！！ざまあｗｗｗ顔面吹き飛んでやんのｗｗｗ俺のなのはに手ぇ出そうとしやがったからだ！」
「……え？……お、にい、さ、ん？おにい、さん、おにいさん、おにいさん！おにいさん！！！そんな……い、や、いやあああああああああ！！」

耳元、というか耳の肉片の前で騒ぐな、うるさい

「なのはちゃん、もう大丈夫だよ。　あいつは俺がやっつけたからね。　安心していいよ（にこ」
「ひぃっ、来ないで！！」

はっ、嫌われてやんの
まぁ誰だってそうするだろうがな

「どうしたんだい？　なのはちゃん。　ああ、名前を教えてなかったね、俺はアビス・Ｋ・カタストフィ。　アビスって呼んでくれ」
「い、やだ、いやぁっ！おにいさんっ！！しな〝ないでよぉお〝にいさんっ！！」
「ほら、お互いの名前を知ったんだ、僕らはもう友達だよ」

お前はもうちょっと空気読め

「おにいさん……友達なんて要らないっ！！おにいさん以外に友達なんかいらないっ！！！！！！」

なんか、俺の弟と同じようなこと言ってるなぁ

彼女ができましたーとか言ったら刺されないよな？

「いやぁー、困ったなぁ、それは嬉しいけど、なのはちゃん。　でもね、本当に大切な友達がいつかできるはずだよ。　だから僕以外に友達なんか要らないなんていわないように、ね？」

お前のことじゃねぇよ。

常識的に考えて

「さぁ、なのはちゃん？　一緒に遊ぼうよ」

「触らないでっ！！」

「どうして逃げるんだい？なのはちゃん。　もう恐いやつはいないんだよ？」

「い、いや！！離して！！！！」

――――――――――――――ぐしゃっ

あ、こいつ俺の脳を踏み潰しやがった

「助けて！！誰か！！！おにいさん！！！」

まじで嫌がってるなぁ

「ふふ、大丈夫、安心して？」

できねぇよ

ま、そろそろ助けてやろうかな

「助けてよぉ……お〝に〝い〝さ〝ん〝！！！」
「うん、わかってる。　君は僕が守ってあげるよ」

全然わかってねぇし

次元連結システムの応用で破壊されない限り死んでも生き返れるって反則能力だよな、死ぬなんてもうないも同然だし
原作だと原子レベルに分解されても復活できるからなと、いうわけで一瞬で再生完了

うーん、ぬるぽ
――――――お呼びじゃねぇんだよこの野郎パンチ
「がっ！！」
「よくできました」

む、意外と硬いな。　吹き飛ばすつもりだったんだが

「おにい、さん？」
「あん？そうだが？」
「どう、して？だってさっきばらばらに、なって、て、ぃや、いやぁあああああああ！」
「ああ、もう、うるせぇな」
「ほ、んと、に、おに、いさん、なの？」
「偽者に見えんのかよ」
「ふぇ、ふぇえええ、ぇぇえええええええん！！えええええええ
ん！」

「おー、泣け啼け、勝手に泣いてろ、ったく」

めんどくせぇ

転生者には関らないようにしたつもりなんだけどな

なにが駄目だったんだろうか

「何でだ！お前はさっき殺しただろうが！！！何で生き返ってんだよ！！反則だぞ！！」

「……黙れ」

「そうか！わかったぞ！！」

わかってくれるのか

「ヘラクレスの十二の試練だな！！はっ！！なら後１１回殺せばいいんだろ！来れ虚空の雷、薙ぎ払え！『雷の斧』！」

全然わかってなかった

「おにいさん！」

「はんっ、まだまだぁ！！再生する暇もやんねぇぞ！！いくぜ！

影の地統ぶる者、スカサハの、我が手に授けん三十の棘もつ霊しき槍を『雷の投擲』！！！！！

来たれ氷精、闇の精！！闇を従え吹けよ常夜の氷雪！！！『闇の吹雪』！！！！

闇の精霊２９柱！！！『魔法の射手・連弾・闇の２９矢』！！！

来れ氷精！爆ぜよ風精！『氷爆』！！！

氷の精霊１７頭、集い来たりて敵を切り裂け！！『魔法の射手・連弾・氷の１７矢』！！！！

来たれ氷精、大気に満ちよ！白夜の国の凍土と氷河を！『こおる大地』！！！

闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。『白き雷』！！！！！
炎の精霊５９柱、集い来りて！！『魔法の射手・連弾・火の５９矢』！！
契約に従い我に従え炎の覇王！来れ！浄化の炎、燃え盛る大剣！！
ほとばしれよソドムを焼きし、火と硫黄！罪ありし者を死の塵に！！『燃える天空』！！！
『紅き焔』！！！
『エクスキューショナーソード』！
ラストォオオ！『氷神の戦槌』！！！！！！！！」

うおっなんかやべぇ
とりあえず次元連結システムでなのはと次元連結システム本体は守っておかねぇと。
次元連結システムでどの程度蘇生ができるか知らないし、万一ってこともあるからな。

「いやあああああ！！！！！」

叫びすぎだぞ高町なのは

「ふん、俺に逆らうからこうなるんだ。　くっくく、なのはは俺が貰ってくぜ。死人に口なしってな」
「……誰が死人だ」
「お、お前！さっきので死んだはずだろ！？何で生きてんだよ！！」
「はぁ、よくそんな簡単に人殺ししようと思ったな。　少しは葛藤とか躊躇とかねぇのかよ」
「な、何でだ！！何で死なない！！！」

「聞けよ」
「う、嘘だ、オリ主の俺に不可能なんてないんだ！！　ネギまの魔法と、無限の魔力、それに主人公補正を神に貰ったんだ！！俺は主人公……オリ主なんだ！！！」
「めんど。　とりあえず……結界張らないとな」

公園の原型も残ってねぇよ
次元連結システムって便利だな、と思いながらなのはを結界に入れないようにして隔離すると同時に公園を修復

「ったく、結界も張らないで無茶すんなよな」
「クソが！！！俺が、この、俺が！！！！負けるわけがないんだ！！！！」
「少し、黙れ」
「っひぃ！！」
「よくも殺してくれたなアビスとやら」
「ま、まて、なのははお前にやる！　だから！！」
「ふざけたことを」
「フェ、フェイトか、フェイトがいいのか！！ああ！いいぞ！！フェイトもやる！！！だから助けてくれ！！！」
「運命？　誰のことだ？」
「お、お前まさか原作知らないのか！？　よし、俺を生かしておいてくれれば原作のことを教えてやる！！」
「いらん」
「っま、まて！！！」

不様だな

「せめて苦しまぬよう、殺す」

「い、嫌だ！！死にたくない！！俺はハーレムをつくるんだ！！！」
「塵一つ残さず消滅させてやる」
「やめろ！！やめてくれぇ！！！！」

——————平伏せ、天の力の前に、な。

メ　イ　オ　ウ

「うわあああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァ！！！！！！！！」

現れた俺ＴＵＥＥＥＥ（笑）転生者（後書き）

ヘラクレスの宝具は確か１度使った殺害方法は無効だけど、オーバーキルダメージはそのまま通って一回死亡の判定だったはず。

……これも次元連結システムのちょっとした応用だ

オリキャラ設定

かませ犬役のアビス君：以前の第一回転生者サバイバル（ギルガメッシュやアーチャー戦）で弱いほうだが最終的に生き残り、地球組みの転生者のトップクラスとなっていた。意外と強い

リリなのの魔法は使えないため結界を張れないが人払いは使える

主人公補正の効果で勘に従えば死に掛けても生き延びることができる

今回はマサトを見たとき嫌な予感がしたが、なのはにフラグを立てようとしているところ（アビス視点）を見つけ、嫌な予感はこのことだと思い込み戦闘を挑む

ハーレム作りを目指す転生者地球連合総勢７名でリーダークラスなのは、フェイト、はやての３名を貰う権利があった

第一回転生者サバイバルでは不意打ちをしまくり勝利。

その戦いにヘラクレスはいなかったので再生能力を持つマサトをそうだと考え、魔法を打ちまくるが次元連結システムの応用で防がれた後メイオウ攻撃で消滅する

なのはの……初めて、なの（前書き）

エロではないよ？
残念だったな！！

ところでなのははって言う分には良いけど書きづらいし字面も悪いよね

なのはの……初めて、なの

結界を解き、公園に戻った俺はなのはに突然抱きつかれた

「恐かったよぅ、おにいさん……おにいさん、ふぇぇえん…ひっく」

「鼻水つけんじゃねぇよ、汚ねぇな。　ほら、落ち着くまでここにいてやるから」

まったく、本当に俺の弟みたいなやつだな。

すぐ泣くとことか、抱きつくとことか。

まあ、子供だしな。

暫く泣き止まないだろうな。

目の前で初対面とはいえ兄の友達がばらばらの肉片にされてたんだ。

普通なら、トラウマものだし、というかこれが原因で血を見ると不安定になるとかないよな？

暫くしてなのははようやく落ち着きだした。

「もう大丈夫か？」
「うん、……でも、もうすこし、もう少しだけなの……」
「はあ、もう日が暮れる頃だ。　帰るぞ」
「……うん」

うわ、目が真っ赤だ、やべぇ、恭也に怒られるかも

「高町ー、帰ってきたよー」
「？　どうして喋り方変えたの？」
「気にしないでね、なのはちゃん」

というか、帰ってきたっつってんだよ
服掴んでる手をいい加減離せ。

「お帰りなさい、なのは。　あら、あなたは？」
「高町の同級生です。　なのはちゃんを迎えに行って欲しいって頼まれたので」
「そうなの、恭也がねぇ。　あ、そうだ。　恭也を呼びに行ってくれないかしら。　そろそろ晩御飯の時間だし」
「かまいませんよ」
「ありがとう、お客さんにこんなことさせちゃってごめんなさいね」
「忙しいんでしょう？　このぐらい、いいですよ。　それじゃあ呼

びに行ってきます。　まだ道場にいますよね」
「ええ、恭也ったらこんな時間まで休まず道場に篭りっきりで……。
あ、なのは、お皿並べるの手伝ってちょうだい」

恭介を呼びに行こうと足を進めたときだった

「いっちゃ、やなの……」
「なのはちゃん、高町呼びに行くだけだから、すぐ戻ってくるからね」
「本当？」
「本当だよ」
「いなくならない？」
「うん」
「……わかったの」

いつまで引っ付いてんだこいつ

「あらあら、懐かれてるのね」

好きで懐かれたんじゃない
ちくしょう、ほんとにトラウマ作っちゃってるじゃないだろうな
目を離した隙にまたばらばらされるとでも思いこんでたらどうしよ
俺の責任だよな～
任せろ、見たいな事言っちゃったし

「高町ー！、晩御飯だってよー！」
「ああ！すぐ行く！」

ほんと、どうしよ

「またせたな」
「んーん、全然待ってないよ」
「なのははどうだった？」
「えーと、本人に聞いて言い辛そうだったら僕に聞いてくれ。　ほら、精神的なことだし」
「……そうか」

あ、俺もそろそろ飯時だ。
美玖が飯作ってるだろうけど、木原は待ってくれないだろうな

「あ、恭ちゃん、遅いよ～」
「すまん」
「あれ？その人は？」
「俺の友達だ。　今日なのはの相手してもらってたんだ」
「えっ！！恭ちゃんに友達なんていたの？！」
「……悪いか？　まあ、いい。　俺が最近学校を休むから心配になったそうだ」
「そうなんだー」

これが高町妹か
今中学1年だったな

「初めましてだね、僕は秋津雅人っていうんだ」
「あっ、はい。　私は高町美由紀です」
「家の手伝いしてるんだって？えらいね」

とりあえず、褒めておく

「え、そんなことないですよ～。　えへへ」
「その年で謙遜するなんてなかなかできないよ。　凄いなぁ」
「そ、そうですか？」
「うんうん、高町なんて学校サボってるからね」
「む、まてマサト。　それには理由がだな……」
「高町は妹ちゃんを見習うべきだよ。　学校ぐらいちゃんとこいよな、今年は受験あるんだぜ？」
「うぐ、……く、わか……った」
「わ、恭ちゃんが不利だ。　珍しい」
「……美由紀。　今度から2倍にしようか」
「ご、ごめんなさいっ！！」
「あっはははは、面白いなぁ」

やはり家族はいいものだ

「……む～。　……えいっ！」
「痛っ」

高町兄妹と話していたら脛を蹴られた
地味にいてぇ

「こら！なのは、なにしてるの！　秋津さんごめんなさい、いつもは人を蹴るような子じゃないんですけど……」
「ん、大丈夫だよ。　怒ってないから」

「……ご飯なの」
「あ、ああ。　少し長話が過ぎたな。　早く行こう。　美由紀、行くぞ」
「そういえばそうだったね、急がないと冷めちゃうかも」

そういえば俺もそろそろ帰らなきゃな
美玖が泣き出すかもしれない

「僕はそろそろ帰らなきゃ」
「！！」
「そうか、気をつけて帰れよ」
「また遊びに来てくださいね、秋津さん」

玄関に向った俺だったがこのガキが道を塞いで通れない

「……え～っと、帰れないんだけど」
「……」
「なのは、邪魔をしてやるんじゃない」
「……おにいさん、いなくならないって、いったもん」
「え、っと、なのは？どいてあげて？。　秋津さんは帰らないといけないんだから」
「……や、なの」

うっわ～弟と同じことしてやがる
俺が高校の寮に入って最低2年離れ離れになるって言ったときと全く同じ反応だ
というか、俺のこのイラつきは木原の性格なんだろうか
前世だと微笑ましかったんだけどな
今、すっごく鬱陶しい

「なのはちゃん。　明日もまた来るから、ね」
「明日も……？　絶対？　絶対に来てくれるの？」
「うん、約束だ。　明日もここに来るよ」
「……わかったの。　でも！　必ず約束は守ってもらうの、なのはの前から勝手にいなくなっちゃ駄目なの！」
「ああ、必ず、だよ」

本当にめんどくさいなぁ
こんな約束しちまった
ていうか報告の義務付けられたし

あ～あ、まぁ子供だしいつか忘れてくれるだろ

「……随分と、仲がよくなったみたいだな？マサト」

大変だ
恭也がご立腹だ

「いくら俺の友でも、俺より弱い野郎になのはは渡さん！」

今日遭った転生者と同じようなことを言っているのに何故こいつはこんなにかっこよく言えるのだろうか

「おにいさん」
「どうしたんだい？なのはちゃん」
「名前……」
「名前……？
「まだ、教えてもらってないの」
「え？そうだっけ」

「マサト、お前名前も教えずに遊んでいたのか？」
転生者に絡まれてそれどころじゃなかったんだよ
「じゃあ改めまして、秋津雅人だよ、なのはちゃん」
「高町なのはなの、　これからもよろしくなの」

「えへへ……これで友達、だね」
「え？なんで？」
「だって、お互いの名前を教えあったの」
なんだよそのとんでもない理論は
あれ？あの転生者も同じようなこと言ってなかったっけ？

「よかったな、なのは」
「よかったね～」
「ありがとうなの、お兄ちゃん、お姉ちゃん」
「どうしたんだい？」
「ああ、なのははあまり人と接する機会が少なくてな、友達がいないんだ。　だからいつも一人で公園に行ってたんだが……」
なるほど、俺が始めての友達になるわけだ
「なのはの初めては……おにいさんなの。　……にゃははは」
「その言い方だといろいろ誤解を招きそうだからやめてね？なのはちゃん」
なのはの言葉を聴いた瞬間から後ろのシスコンが殺気を放ってくる

「ほ～う、マサト、まさかなのはを誑かすとはな……どうなるか、覚悟の上か……？」
「ちょ、ちょっとちょっと、すと～っぷ！　恭ちゃん落ち着いて！」
「邪魔だ！退け！！美由紀、斬れないだろうが！！」
「真剣なんてどっからだしたのよ～！」

高町妹が止めてくれている隙に逃げよう
まったく、餓鬼に興味なんかないっての。

「それじゃあ、また明日」
「うん！また明日、必ず来てなの！」

明日は美玖も連れて来るかな……
子供同士、勝手に仲良くするだろうし、そうなったら俺は楽できそうだ。

なのはの……初めて、なの（後書き）

初めての友達でこんなにもエロい言い回しができるとは思わなかった。
それにしてもＲ１８の線引きって結構曖昧なんだよね。

べろちゅーはギリおｋ？
……いや、［べろちゅーは］しないよ？

とらハのキャラデザが好きだから出そうと思ったけど、よく考えたら某、りりなのの設定もあまり知らないでござる。とらハなんて名前と画像だけしか知らないでござる。
レンとか晶とか出したいって思ったんだけどな。
今度、りりなの全部見終わったらとらハのプレイ動画でも見ようかな……
まだ無印のさわりだけしか見てない私がいる。
ｗｉｋｉ先生だけに頼ってたら顰蹙買いそうな気がするよ。

次話、美玖が始めて他人の家に、しかも遊びに行く。
地味にはしゃぐ美玖、怒れる妹魂

そして寝惚けるなのはは……

高町家、なのは寝起きドッキリ（前書き）

いや、別にドッキリじゃないけどね。

高町家、なのは寝起きドッキリ

ようやく高町家から出られた俺は誰にも見つからないようにして次元連結システムを使い帰宅した。

「ただいま」
「お帰りなさい、マサト君。　随分遅かったね」
「ああ、友達の家に行っててな」
「……高町さんの家？　ああ、妹さんがいるんだったね」
「？美玖、マサキはいないのか？」
「マサキさんならマサト君より先にご飯食べて知り合いの所に行ってくるって」
「マサキが美玖にどこに行くかを伝えたのか……」
「そういえば最近はその知り合いの所に行ってるらしいわよ」
「誰だそれは」
「ガラクタだって言ってたわ……」
「ガラクタ？」
「うん、たぶん人工的に造られた人って意味なんだと思う」
「……そうか」

知り合い？　誰だ？　というか、あいつに知り合いなんていたのか？
疑問が尽きないがあいつは情報屋なんてことをやっているし、客の一人と会ってきているんだろう。

「マサト君、ご飯温めてくるね」
「ああ、頼む」

美玖がパタパタと駆けてレンジに料理を入れている

そういえば、明日も高町の家に行く約束させられたんだったな。
あれの相手はなんかめんどくさいしな……

「美玖、明日なにか用事があるか？」
「ないけど……どうかしたの？」
「明日も高町の家に行く約束をしていてな、一人じゃ暇だろうから一緒に行かないか？」
「マサト君と一緒に？いいけど迷惑じゃないかな？」
「別にいいんじゃないか？恭也の妹はお前と2つしか変わらないからな、遊んでやるといい」
「そう、わかったわ」

よし、身代わりゲット
子供の相手は子供にさせるのが一番楽だしな、美玖となのはを公園で遊ばせておいて俺はベンチでゆっくりすることにしよう。

翌日、朝飯を食べ終わった俺と美玖はマサキに遊びに行くから昼飯は適当に食べるように伝えて高町家へと向かった。
その道中、高町の親が経営しているらしい店を通ったので少し寄っていくことにした。

「あれ？ここって雑誌とかに載ってたお店じゃないの？」
「ああ、ここが高町の親がやってる店だ」
「凄い人気だね」
「最近父親が入院してから余裕がなくなってるらしいがな」
「あ、シュークリームだ～おいしそ～う」
「ほら、行くぞ」
「マサト君、シュークリームだよ、ケーキもあるよ！」
「……買ってやるから」
「ほんと！？やったぁ！！」

美玖ってこんな性格だったかな……？
美玖はあまり外出できないからな、興奮してるのだろう

「あら？秋津君いらっしゃい」
「こんにちは」

店に入ると恭也の母親が挨拶をしてくれたので返しておく

「秋津君、その子は妹さん？」
「ええ、なのはちゃんと年も近いので仲良くするだろうと思って一緒に連れてきちゃいました」
「初めまして、氷室美玖です」
「ふふ、しっかりしてるのね。美玖ちゃんは何歳なの？」
「３つです」
「３歳だったらうちのなのはの２才下ね。　美玖ちゃん、なのはと仲良くしてあげてね？」
「はい」

美玖、緊張は…してないな
やっぱりこっちが素のようだ

「あ、秋津君。　また頼みたいことがあるのだけど構わないかしら」
「いいですよ」

昨日と同じく恭也を呼びに行けばいいのだろうか

「なのはを起こしてあげてほしいの」
「なのはちゃんを？」
「ええ、昨日は興奮して眠れなかったみたいで……よっぽど楽しみにしてたみたいね」

遠足前の小学生みたいな理由だ
昨日は泣きじゃくってたから疲れてすぐ寝ると思ったんだが

「いいですよ、そのくらい。あ、すみませんがシュークリームとケーキを帰るときに買って行きたいので１つずつ残しておいてくれませんか？」
「うん。美玖ちゃんにちゃんと渡しておくわ」

高町母への挨拶をすませ、美玖のシュークリームなどの予約もしていった俺達は高町家に着いた。
高町母から頼まれたなのはを起こすことを早く終わらせようと家に上がって起こしに行こうとしたが、そういえば部屋を知らなかった。

「大変だ美玖」
「どうかしたの？マサト君」
「なのはの部屋を俺は知らない」

「……え？」
「聞き忘れていたな……道場に行って恭也に聞くか」
「もう、何で知らないのに引き受けたのよ」

と、いうわけで道場に来た

道場では恭也が休んでいた。　ちょうど休憩のようだ

「おはよう高町」
「マサトか、おはよう。　む、その子は……？」
「ああ、僕の妹だよ。　なのはちゃんの友達になれるんじゃないかと思ってね」
「そうか、すまないなそんなことまでさせて。　名前はなんと言うんだ？」
「初めまして、氷室美玖です。　マサト君がいつもお世話になってます」
「……マサト、この子は一体いくつだ」
「3歳だよ」
「その割にはしっかりしているな」
「僕の自慢の妹だからね」
「そうか……」

なのはを起こしに行くために部屋を恭也に聞いておかなければな。
間違えて他の人の部屋に入ってしまったら大事だ。

「なあ恭也、なのはちゃんの部屋はどこか教えてくれない？」
「……ほう、すまないが、もう一度言ってくれないか。　よく聞こえなかった」

「いや、だから……あ」

やべ、地雷踏んだ？

「いや、なんでもないよ、行くよ美玖」

「まあまてマサト、お前とは話があるんだ」

殺気がやばい、そういえばこいつシスコンだった。　そんなやつに妹の部屋はどこだ何て聞いたらどうなるかぐらい考えておくべきだった

「待ってくれ高町。　これには訳が」

「やられ役がよく口にしそうな言葉だな。　そんなことをいうやつは尚更怪しいぞ」

「高町の母さんに起こしてきてほしいって頼まれたんだ」

「そんな理由を信じられると本気で思っているのか」

「事実だ」

「残念だ、お前がそんなことをするやつとは思っていなかった」

「聞いているのか？」

「問答無用だ。　これ以上見苦しい言い訳などしてほしくない」

……逃げろ！！

「待てっ！！！」

「お前殺す気だろ！？」

「妹を守るためなら些細なことだ！！」

「ダチ殺すことを些細なことっつったかてめぇ！」

「マサト君、素出てるよ」

んなこと言ってる場合じゃないだろ美玖

美玖と俺はシスコンから何とかリビングへと逃げ延び、そこで高町妹を発見した。

「あれ？秋津さんじゃないですか、どうしたんですか？」
「ああ、妹ちゃんか。　いや、高町に怒られちゃってね」
「怒られたって……何したんですか」
「いや～なのはちゃん起こすように頼まれたから部屋教えてっていったらね」
「あ～。あはは……恭ちゃん、妹思いだから……はぁ」
「ねぇ妹ちゃん、高町だと怒られるから教えてくれない？」
「あ、はい。　なのはの部屋は……」

こうしてようやくなのはの部屋を突き止めた俺達はなのはを早く起こすことにした。
部屋に入ろうとドアに手をかけたときに美玖に呼び止められた

「待ってマサト君」
「なんだ？」
「いきなり女の子の部屋に入るなんて失礼じゃないかしら」
「5歳児だ、問題ないだろう」
「そうかしら……もしかしたら大変なことが起こるかもしれないでしょ？」

「どんなだ？」
「そうね……例えばパジャマがはだけてるとか」
「5歳児に興奮できるほど俺はガキじゃない」
「こういうのは見られたほうが嫌なんだけど……」
「問題ない、寝ているほうが悪いんだ」

このくらいの子供はまだ異性の意識が薄いからな。
子供は小学2年まで同じ教室で着替えるし。

「起きろ」
「むにゃむにゃ……うにゃぁ～う……にゅぅ・・・」
「起きろ」
「にゃぁ～？おにぃさぁん……むにゅむにゅ」
「寝惚けてるわね」
「ああ、そうだな」

「にゃあああぁぁぁぁ……」
「なっ」

揺さぶってやろうと近づくと抱きつかれた。
子供の矮小な体躯では俺を倒すことは出来なかったが、俺の体に蛸のように足を絡ませ、密着してきた。
なんというか、こう、見た目児ポ法に引っかかりそうな感じの絡みつき方だ。

「な、なな、何をやってるのマサト君！！」
「俺は何もしていない」
「いいから早くその子起こして離れなさい！」

どうして俺が誰かとくっつくと理不尽に怒られるのだろうか

このままだと美玖が阿修羅と化しそうなので早く起こそう

「おいガキ、起きろ」

「にゅう……むにゅぅ……」

「おい！」

「すー、すー、むぅ……うーん」

「起きろ！」

「うにゃぁ？……………………………にゃあああああああああああああああああ！！！！！！！！」

さっきよりも大きめな声で起こすと、俺の顔を見た瞬間、一瞬目を見開いて固まり突然叫びだした。それはもう鼓膜が破けるかと思うくらいの声であり、それこそこの声は恭也に聞かれていてもおかしくないほどの絶叫だった。

「なのは！！大丈夫、か……」

シスコンが５秒たたないうちにやってきた。

なのはは俺を見たまま固まっている。

――――――俺に絡み付いた体勢のままで。

「そうかそうか、やはりそうだったのか、マサト。お前のことは少しだけ信じていたんだがな、それもここまでのようだな」

「また何か誤解してるよ。僕は何もやっていない」

「今の状況を見て俺がそれを信じると思っているのか？」

まあ、どこからどう見ても５歳と１５歳の男女が妙にエロく抱き

合ってるようにしか見えないな。
……あれ？俺こいつにロリコンって思われてる？

「さて、覚悟はいいか？」
「駄目」
「そうか、だがそれはお前の都合だ、俺には関係ない」

「お、お兄ちゃん……」
「なのは、大丈夫か？何もされてないか？」
「お兄ちゃん……」
「どうした？」
「で…」
「で？」
「出っててよーーー！！！！」

俺と恭也はなのはの二度目の絶叫によって部屋を追い出された。

「マサト君、だから言ったのに……」
「美玖、あれは僕にデリカシーがないんじゃなくて、なのはちゃんが寝惚けてただけだろう？」
「部屋に入ってる時点でデリカシーないでしょ。　それに、女の子は何歳だろうと気になることなの」
「……うーん」

とりあえず起きたみたいだし、良しとしよう。
父さんに伝えなくては……などと呟く恭也は見なかったことにしておく。

高町家、なのは寝起きドッキリ（後書き）

士郎の回復の時期がわからない。
なので意識回復は1ヶ月、完治はあと3ヶ月ってとこにしておきます。

次話、恭也が怒りのあまり出血します。

※翠屋と高町家の位置関係を少々誤解してた様なので修正

誓約、汝この者を……（前書き）

子供のおままごとってそれぞれの好感度が判るから気まずくなる。
寝は幼稚園児の頃誰も使わない砂場で蝉の幼虫と遊んでたなあ。
１５ｍ先にパピー&マミーゴッコして、ちゅっちゅしてる２人を蝉と眺めてた。

誓約、汝この者を……

あのあと恭也の鉄拳をくらった俺はなぜか美玖に説教されていた。

「止めなかったのは私も悪かったけどそれでも勝手に女の子の部屋に入っちゃ駄目よ。デリカシーのない人だとは思われたくないでしょ？それに、何で寝惚けた子供に抱きつかれるのよ、マサト君ならあのぐらいかわせた筈でしょ？全く、あんな破廉恥なこと子供にしちゃうなんて最悪だわ。マサト君、もう絶対そんなことしちゃ駄目だからね！わかった？……ちょっと聞いてるの！？マサト君！」

やばい、美玖のマジ説教とか初めてなんだが。

そもそも美玖が怒るなんて一度もなかったしな。

というか何をそんなに怒ってるのだろうか。

女の子部屋に入っただけでこんなに怒るやつだったのか？

「マサト君！反省してるの！？」

「うんうん、してるしてる」

説教なげぇ

美玖さん説教マジ長いっす

ちなみに恭也は美玖になのはをマサトから守ってくれと言って道場に戻っていった。

「マサト君！？マサト君！！ちょっと、聞いてるの！？」

なのはよ……頼むから早く着替えて俺を解放してくれ……

「お、おにいひゃん。お、おまたせにゃの……う〜」

キタッ！！

親の帰りを待つ雛鳥のように首を長くして一日千秋の思いで待っていたぞっ！全く何をしていたんだこのガキ、美玖の説教ももうリピートに入る所だったじゃないか。ああ良かった、これで正座をしないで済むよ。ガキめ、俺を待たすなどいい度胸ではないか、ふはははは。　噛みまくりなのは黙っていてやらんこともないぞっ！

……少しはしゃぎすぎた。

これは前世を含めて上位に入る黒歴史となることだろう。

「おにいさん、ど、どうかな……？」

？……なにがだ？　いきなりどうかと聞かれて俺はなんと返せば

いいのだろうか

悩んでいるとそれをみた美玖がこっそり耳打ちをしてくれた

「マサト君。ほら、服とか髪型とか悪い所がないか聞いてるのよ」

あん？服？子供っぽくていいんじゃないか？

髪型？梳かしただけじゃねぇか、別におかしいとこなんて何もないだろ

「可愛らしい服だな」

子供らしい服だな、とは言えなかった。

なぜなら隣に美玖がスタンバっているからだ。

若干身体を動かしやすい体勢にしている。

俺が失言でもすれば間違いなく跳び蹴りが飛んでくるであろう体勢だ。

「ほ、ほんと！？」

「ほんとほんと」

「えへへ、やったの」

「ほら、その髪型も緑のリボンによく合っているな」

「そ、そんなことないよ～」

「……ふんっ！」

「ぐぁっ」

なのはを頑張って褒めていたら美玖に脛を蹴られた

「み、美玖？……なにを……？」

「マサト君の馬鹿っ」

だれが馬鹿だ。
脛は地味に痛いんだぞ。
お兄ちゃん、そんなことする子に育てた覚えはありません。
大体なんで今日はそんなに怒ってるんだよ

「……おにいさん。　その子……誰？」
「ああ、教えてなかったな美玖は……
「初めまして氷室美玖です。　よろしくね？」
「にゃっ！え、えと、よ、よろしく、なの」
「なのは、互いの名を交換しなければ駄目なんじゃないのか？」
「そ、そうだったの……えと、私、高町なのは、５歳です。」
「よかったな、友達ができたぞ」
「あ……」

どうして、しまった！みたいな顔をするんだ。

「マサト君、そういえばなにをして遊ぶつもりだったの？」
「……さぁ？」
「考えてなかったのね……」
「なのははしたいこと、あるか？」
「いいの？えっとね、なのは、おままごとしたいの」
「じゃあ、それで決まりね。　マサト君、嫌とは言わせないわよ。
何も考えてなかったことを後悔なさい」

なん・・・だと
おままごとなんてする歳じゃないってのにやらされるのか？
そんなこと、ただの罰ゲームじゃないか。
断固辞退させてもらおう。

「マサト君？あなたは強制参加よ。　というより3人しかいないんだから当然よ」

駄目だった

「それじゃあ始めるわよ」
「はいはーい！なのははおにいさんのおよめさんになるの！」
「……（恭也にばれたら殺されるな）」
「……なのはちゃん駄目よ？マサト君のお嫁さんは私なんだから」
「……なのはなの！」
「……私よ！」
「なのは！」
「私！」
「「う～」」
「喧嘩してるんじゃねえよ、やれば良いんだろ？」
「「どっちとするの！」」

……こんな修羅場嫌だ。
やるならもっと綺麗な女の子にやって欲しい

「正直どっちでもいい」
「……ヒソヒソ（マサト君の意気地なし）
「……ヒソヒソ（おにいさん甲斐性無しなの）

なぜか俺が貶されている。
改造されて聴力も上がってるから聞こえてるんだよお前ら。

「それじゃあこうしましょう。　マサト君は私達2人と結婚するこ

と！」
「重婚は犯罪だし美玖は妹だろ」
「おままごとだから法律は関係ないの！それに妹じゃなくて義妹だから問題ないわ」

いや、あるだろ。
……あれ？ないのか？どっちだ？

「あ、そういえば神父さん役は誰がするの？」
「そうね、神父さんだからできるなら男の人がいいんだけど……」
「……（駄目だ、恭也だけは絶対に呼ぶな。頼むから呼ばないでくれ）

「マサト、なにをしているんだ？」

神は此の世にはいない。
いや、いるにはいるがアレだから。
うちのシマじゃあれはノーカンだから。

とにかく、恭也が何故かここに来てしまった。
これは拙い。
はやく何とかしないと殺られる。

「あ、おにいちゃん！どうしたの？」
「ああ、少し休憩をな。　無茶な鍛錬はやめろとマサトに言われたからな」
「じゃあ少しだけなのはと遊んでくれる！？」
「！！……ああ！いいぞ」

しまった！

シスコンは妹の頼みを断りきれない！
「じゃあおにいちゃんは神父さん役なの」
「お。おままごとか？よし、いいぞ」
「おにいさん、はやくはやく」

嫌だ……逝きたくない。
結婚は人生の墓場だとか言うが俺には真似事ですら断頭台に見えるよ……

「？俺が神父さんなら新郎新婦は誰なんだ？」
「なのはと美玖ちゃん！」
「そうか、なら良いんだ。マサトだったらどうしようかとおもっ」
「が、おにいさんのおよめさんなの！！」
「……ほう？」

恭也の殺気が増大した。
間違いなく殺る気だ。

「マサト、貴様は、貴様というやつはっ！己の妹だけでは飽き足らずなのはまで！！おのれっ！そこに直れっ！！叩き斬ってくれる！！」
「待て待て、落ち着け、これはままごとだ。　つまり結婚の真似事だ」
「俺に……なのはがお前の物になるのを黙ってみていろと言うのか……！？」
「話が飛躍しすぎてんだよ。少し黙って聞いてみろ」
「っく」
「いいか、俺もこの話は断ろうとしたんだ。だが、そうしたら美玖となのはが喧嘩しかけてな。仕方ないから了承したが、どちらか選

べといわれてどっちでもいいといったらこうなったんだ」
「貴様が悪い」
「何故だ」
「解らないのか」
理不尽だ。暴挙だ、横暴だ。
「やはり貴様のことは父さんと一緒にじっくりと話し合う必要がありそうだな」
そのときは次元連結システムをフルにつかって逃亡しよう。
「おにいちゃん、はやく～」
「マサト君？遅いわよ～」
「……くそっ。いいか、マサト。なのはの頼みで仕方なくやってやる。だが俺は絶対認めないからな」
うっわ～すっごく悔しそうな顔だ。怒りも混じってるな。
苦渋を舐めたってこんな感じかな？
「ま、さとさん、あなたはこの女性……っく、この女性達を……健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も……愛し合い敬いなぐさめ助けて変わることなく……おのれ……愛することを誓いますか」
無理すんな、見てるこっちが辛い
「はい。誓います」

「っき、きさっ……っぐぅ……っくそ」

今か今かと待つなのはと美玖に見られながら必死に堪える恭也。
お前は今、泣いていいんじゃないかな。

「なのはさん、美玖さん、あなたはこの男性を健康な時も病の時も富める時も貧しい時も良い時も悪い時も……愛し合い敬いなぐさめ助けて変わることなく……愛することを誓いますか」
「「はい。誓います」」
「ぐ、ぐぐぐ……さ、さあ、もういいだろう。これで終わりだ」

「おにいちゃん！まだちゅーしてないよ！」
「駄目だ！！なのはにはまだ早い！」

高町兄妹が言い争っている間に美玖が俺に近づいてきた

「マサト君、時間がかかりそうだから先に私としましょうか」
「な、おい美玖！おまっ…んんぅ…な、なにをしている！」
「なにって……誓いのキスよ。うふふ、絶対幸せにしてね？」
「これはおままごとだろうが……」
「もう、マサト君の馬鹿……」

俺はガキに欲情する変態じゃないんだよ
ああ、俺の今生の初キッスがこんな子供だとは……
前世の弟よりもまだましだが。

「おにいちゃんの馬鹿っ！だいっきらい！！」
「な、待てなのは。俺はなのはのことを思って……」
「なのははおにいさんとけっこんするの！！」

「だからもう少し大きくなってからだな……」
「大きくなったら結婚していいの？」
「っぐ……」
「駄目なの……？」
「い、いや、駄目じゃない」
「ほんと！？やったぁ、おにーちゃん大好きー」
「……そうか」

なんということだ……
恭也……握りこぶしから血が出ているぞ。

「おにいさん」
「ん？ああ、終わったのか」
「んーん。もうすぐ終わるから少し耳貸して？」
「ああ、なんだ？」
「えいっ」
「んぷっ……」
「ぷはっ……えへへへ、なのはの初ちゅーなの」

こいつらは……
いつか黒歴史になっても知らんぞ

「マサト……後で話があるんだが……？」
「おっと、恭也。もうそろそろ休憩も終わりじゃないのか？」
恭也の怒りが爆発しかけていたが、何とかはぐらかす事に成功した。

「もうそろそろ6時か……」
「え？もうそんな時間なの？そろそろ帰らなきゃね」
「もう帰っちゃうの？」
「ああ、じゃあな」
「またね、なのちゃん」
「うん、またねおにいさん、美玖ちゃん」

最後に恭也に帰ることを伝えておこう

「マサト、帰るのか？」
「うん、もうそろそろ晩御飯作らないと」
「そうか……また、来いよ」
「ああ」

さあ、帰ろう
マサキがいつ癇癪起こすかわからないからな。
お土産は美玖の買ったケーキを3人で分ければいいだろう。

誓約、汝この者を……（後書き）

癇癪持ちのマサキさん（ツンデレ）
「今帰った……誰もいないだと…？どういうことだ！」

次回、現れるマサキの知り合い。
マサキ、ロリコン疑惑。
皺だらけになりなのはの体液でよれよれになったマサトの服を着る幼女。

→コレってネタばれになってるのかな？
多少捏造してるけど嘘はついてないから……

今ガラクタつながりでパツキン幼女を家族にするか悩んでる。
んー。家族にするなら強制的にプレシアおばさ●が生存ルートに入るからなぁ

来訪者ドクター（前書き）

すぐにわかりますかそうですか。
リリカルドクターといえばあの人です。
茶髪のとらハ少女といえば（いっぱいいます）あの子です

来訪者ドクター

帰りに買い物に行った俺達は今日の晩御飯について話していた。

「美玖、今日は何にするんだ？」

「うーん、そうね。　お魚にしましょうか。あ、カレーも作っておきましょ」

「じゃあ野菜は俺が持って来よう。美玖は魚を選んでおけ」

「うん、マサト君お願いね」

どうやら今日は焼き魚にするようだ。

ちなみにカレーは美玖の好物であり、カレーは2日目からが美味しいそうだ。

俺とマサキはどっちでもいいんだがな。

買い物を済ませた俺達は路地に入り込んで人に見られないようにしてから次元連結システムを使って家に帰った。

「ただいま」

「ただいま。おかえりなさい」

「マサキは……いないのか？」

おかしいな。

マサキはいつも部屋に篭るか、研究してるかなのに……

マサキはこの日、結局家に帰ってこなかった。

「帰ってこなかったな……」
「そうね。マサキさんが帰ってこないなんて……なにかあったのかしら」
「さあな」

美玖と二人で心配しているとチャイムが鳴った

「あら？お客さんかしら……」
「この家に招待されてない人間はマサキの作ったシステムで辿り着けないからな」
「じゃあ……マサキさんのお友達？」
「そういえば知り合いの所に行ってるんじゃなかったか？」
「とりあえず用件を聞きましょう」

「ふむ、ここが木原君の家かね？」
「はい、あの、あなたは……？」
「とりあえず中に入れてはくれないかね」
「あ、あの……」
「ドクター、自己紹介がまだです」
「ああ、そういえばそうだったね。私はの名はジェイルスカリエッティという」
「私はウーノです」
「はあ、あの、マサキさんとはどういった関係で……？」
「知り合いさ、いろいろと事情があるのだがね」
「美玖、とりあえず家にあげろ。外はもう寒いだろう」
「あ、うん、わかった」

ジェイルスカリエッティ……どこかで聞いたことのあるような名

前だ。

「おお、君が秋津君かい？ふむ、やはり木原君にそっくりだね。素晴しい」

「スカリエッティ、といったな。何の用だ？マサキならば昨日から帰ってきていないが……」

「ああ、そうだったね。まだ用件を言ってなかった。くくく、すまないね。思いの外興奮してしまって忘れていたよ。ああ、君は木原君のクローンであり最高傑作だ。本当に素晴しい。本当ならば君を解剖してみたいのだがそれをすると木原君に怒られてしまうしな……」

「……ドクター」

「おお、いやすまないね。それで、用件だったね。木原君からの言伝だよ。1ヶ月後に引っ越すから準備をしておけ……だそうだよ」

「なっ！……マサキは今どこにいる！！」

「私の研究所にいるよ。それじゃあ、伝えたからね。1ヶ月したらまた来るよ」

「それでは失礼します」

そういって2人は転移魔法で消えていった

「マサト君……引越しって……」

「ああ、マサキは一体なにを考えているんだ？」

スカリエッティ達が帰っていった後、晩御飯の準備をしだした頃にマサキが帰ってきた

但し小学生ぐらいのやや不機嫌な表情の子供を連れて

しかも俺の私服を着せているため裾がだるんだるんになっている。
まあ、なのはの鼻水や涙やらで、染みや皺が取れなくなってしまって捨てる予定だった物なので問題は無いが。

「帰ったぞ」
「……マサキ、話がある。来い」
「引越しのことならば文句は聞かんぞ。最近『龍』とかいうやつらが俺のことを嗅ぎ回っていてな。居場所が割れることはないだろうが念のためだ」
「ああ、そのこともある。だがそれは後だ」
「狙われた理由か？ふ、優秀な情報屋とは狙われやすいものなのだ。私は素人だからな。天才とはいえ経験まではカバーしきれなかったのだ」
「そこじゃない」
「学校のことか？次元連結システムを使えば一瞬で着く。そのまま通って問題ない」
「それは良かった。だがそこでもない」

何故こいつは何を聞こうとしているのかがわからないのだろうか

「……ふん、何が不満だというのだ。お前達を置いて行ってもいいのだぞ」
「お前が家族を気にしてくれるようになるとはな……」
「……ふん、心配しているわけではない。俺の作品を俺のそばに置いて何が悪い」

あ、デレた
それにしても大分角が取れてきた。
嬉しいが素直に喜ぶのも癪なので皮肉を言ってみる。

「……お前もある意味俺の作品だがな」
「……」

ここは黙るのか

「スカリエッティとはどこで知り合った？と聞きたいが先ずはここから聞いておこうか」
「なんだ？」

とりあえず叫ばないよう自分を落ち着かせるため深呼吸

「その子はどこから拉致ってきた」
「……（ビクッ）」

何故そこのガキがビビる

「ああ、このガキか。さっきからなにを気にしているかと思えば……」
「おいマサキ……お前まさか……」
「何が言いたい。はっきり言え」
「ペドか？」
「……せめてロリって言ってよね」

このガキが始めて口にした言葉は、抗議の声だった。
しかも結構どうでもいい。

「残念だったな。俺がそういった趣味を持っていたならば貴様にもそれは受け継がれている」
「……そうか。」

つまり俺がロリコンになっていた可能性がある訳か。
嫌な可能性だ。

「で、どっから連れてきた。元いた場所に帰して来い」
「元いた場所に帰せばこいつは複数の男に（自主規制）されることになるが、それでもいいのか？」
「よし……よくやった。とりあえず美玖に一人前晩飯の追加を頼んでくる」
「早くしろ。ふ、俺の分のおかずも一品追加だ」

……何故こいつはおかずを要求している上に誇らしげなのだろうか。
馬鹿なのか？？才なのに？なのか？

まあ、善いことをしていたのでとりあえず後でデレるまで褒めちぎってやろう。

「ところでマサキ、この餓鬼の名はなんと言う」
「知らん」
「は？」
「助けてと叫んでいたからギリギリまで助けず見学していたんだが……」
「おいこら」
「服を引き千切られて裸に剥かれた時は、いい声で泣いていたな」
「助けろよ」
「それから男達はどうしたと思う？」
「まさか……」
「男達が誰も助けに来ないなどと典型的なやられキャラの台詞を吐

いたのでな、次元連結システムを実験がてら使って男達を殴った後連れてきた」

殺せば足が……つかないな。
直接殴ったわけでもなさそうだし。
いや、そこじゃない。

「……まさか男達がその台詞を言わなかったら助けなかったなんて言うつもりじゃないだろうな」
「くくくくく、ふふはははは、アーッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハ」

笑いどころはここじゃねえよ

「笑い事じゃないと思うのだが？」
「ああ、助けた理由はそれだけではない」
「……？」
「このガキがなかなか愉快な顔と目をしていたのでな」
「愉快？」
「ああ、恐怖に歪んだ顔と、孤独な者の目だ」
「孤独なのはお前もそうだったろうが」
「……だからこそ、だ」
「それだけか？」
「それだけでも、充分な理由にはなった」
「……そうか」

さて、このガキはどうしようか。

「おいガキ、家に帰りたいか？」
「どっちでもいいわ」
「……なら帰れ」
「夜に女の子を一人で歩かせて、危険だと思わない？」

うぜえー
めんどくせー

「……とりあえず話は飯を食ってからだ。お前の分もあるから一緒に食え」
「……ぁ……そう…美味しいのを期待してるわ」

……こいつ

「マサキ、やっぱりこいつを元の場所に帰して来い」
「いいのか？今行けば殺されるぞ？」
「……止めておこう」

まさかとは思ったがこいつもツンデレか？
飯を食えといった時、一瞬嬉しそうにして、帰して来いといった時、絶望したような表情になった。
いや、絶望はツンデレじゃなくても当然の反応だな。

「マサト君、できたわよー。お皿もって行ってー」
「……ああ」

料理ができたようだ、マサキは当然のように座布団に胡坐をかいている。
手伝えよ。

ガキは俺と美玖が料理を運ぶのを黙ってみているだけだった。
気まずそうな表情をしていたところを見ると手伝った方がいいかどうか迷って言えなかったのだろう。

「カレーか……おいマサト、お前の皿のほうが肉が多いぞ。変えろ」
「あ、おい何をする」
「もう、行儀悪いですよマサキさん」
「一品増やせといっておいた筈だ」
「ほら、持ってきましたから」
「ふん」

ガキはまだ気まずそうだった。
知らない家でご飯を食べることが気まずいのだろうか……

「おいガキ、帰らないで親は心配しないのか？」
「……親なんていないわ。孤児だもの」
「心配してくれるやつは？」
「多分いないわ。私に優しくしてくれてたのは４つの塾の先生と知育研究開発の人達だけ」
「学校は？」
「私立聖祥付属４年……だけどもう行ってないわ。いえ、行けなかったわ」
「どういうことだ」
「私が助けられたのはもう何年も前、らしいわ。私が覚えているのは現在からしたら何年も前のことだけど、私にとっては昨日の事……つまり、助けられた日のことね」
「……おい、マサキ。　その間このガキはどうしてた」
「魔法でコールドスリープさせておいた」

なんでだよ。

すぐ言えよ。
しかもこんなことにアル・ハザードの魔法使ってんじゃねえよ。
「何故すぐ言わなかった。というか何年も前ならば元の場所に帰した所で問題ないだろう？」
「今その場所には『龍』がいる。その中でも性犯罪者が、だ」
「……何故眠らせた」
「ごちゃごちゃ文句言ってきて煩かった。助けられておいてめんどくさかったから魔法でずっと時間を止めていたんだが……正直引越しの準備をするとき迄覚えてなかったのだ」
「忘れんなよ」

うっわ～、なんということを……

「眠らした時のままの格好だったからお前の服を使わせてもらった。ふん、俺が助けたのが最近だとは一言もいってないだろう？故に俺は嘘などはついてはいない」
「自分の服使えよ……」
「お前の服が一番汚かったから使いやすかったな」

なんでわざわざ一番汚い服探してるんだよ。

「……捜索届け出されてるとかはないのか？」
「……それは…多分ないわ。孤児だって言ったでしょ？それに、わたし、見ての通りの英知と美貌じゃない？同学年の人たちや大人たちに疎まれてたの……だから…狙いやすかったんだから……」

自分で美貌とか言ってんじゃねえ
まだガキだろうが。

それにしても、孤独……か。
俺にはよく解らないな。
でも、俺の寿命はかなり長いらしい。
きっと皆が死んでいく中俺だけが生き延びて独りきりになるんだろうな。

だからこそ俺はこの子の力になろうという気になれる。
マサキもなんとなくといった曖昧な理由ながらも力になってくれるようだ。

「おい、ガキ」
「なによ」
「俺の家族に、ならないか？」
「……は？」

来訪者ドクター（後書き）

それにしても名前がすぐにわかってしまうのは私の力量がないからなのか。

久遠は出しません。

要望があればペットとして家族に組み込むか、転生者に洗脳されるか書きます。

新たな家族（前書き）

いや、ね？出すつもり無かったんですよ。
しかも４日前まで存在すら知らないキャラだったし……
でもね、なんかバッドエンドが嫌いな私の心が揺れ動いて……

主人公の手によってバッドエンドに行くなら別に良いんですけど、この子の死に方は後味が悪すぎる。いっそ幸せにしてあげよう。という発想です。
やっちゃったね。

新たな家族

マサキが拾ってきた（自称）英知と美貌を兼ね備えた天才美少女。
天才が故に孤独になり、親の情を知らない１０歳のガキ。
ああ見えてマサキも気にかけていた。

俺達の家族は現在３人。
後何人か増えても問題は無い。

「あなた……何…言ってるの…？」
「家族になれと言った」
「そ、それって、ま、まさか……」
「？」

意味が解らないのは俺のほうだ。
何故顔を真っ赤にして怒っている。
というか最近俺は怒られてばかりじゃないか？

ああ、家族が居ないからいきなり家族になれといっても困るだけ
……
「あなた、何いきなり小学生にプロポーズしてんのよ……変態？」

……うん？

「いくら私が可愛いからって、そんな事いきなり言われても……」

おかしい。
もしかしてこいつは日本語ができないんじゃないのか？

「おいガキ、お前は何人だ」
「イギリス人よ。イギリスからの帰国子女。結婚は私１０歳だし法律で無理だけど婚約者なら……」
……何故だろうこんなに話が噛み合わないのは久しぶりな気がする。
どうしてこのガキの思考回路は俺から家族になれと言われて＝結婚になるんだろう
「くくくく……ふふふはははっは、あーっはっはっはっはっはっは！！」
何笑ってやがるこのやろう。
「ふ、俺のことを少女愛好者と言っておきながら貴様自身がそうだとはな」
「……違う」
「何、隠す事はない。俺達は別に気にしないだろう。俺は気にしない」
俺が気にするんだよ
なんとなく気まずいだろうが。
いや、まて。
それ以前に俺はロリコンではない。
「……マサト君、小さい女の子が好きなんだ……」
美玖が心なしか俺を可哀想なものを、だけど別の何かも混じったような瞳で見ている。

「待て、美玖。お前だけは誤解するな。お前だけが最後の良心なんだ」
「マサト君」
「美玖……信じてくれるのか？」
「大丈夫だよ。マサト君が小さい子が好きでも私、頑張るから……」

神は死んだ。
いや、割と誠実にあれは死んでくれないかな。

しかし俺の心は深く傷ついてしまった。
美玖が何を頑張ろうと俺の心の傷は癒えないだろう。

「っくっくくく…ふぅ…。さて、そろそろ誤解を解いてやろう」

マサキ……お前がこんなにも眩しく見えるのは俺が生まれた時の天井の蛍光灯とお前が重なっていた時以来だよ…

「ガキ、一つだけ言っておこう。マサトの言う家族は兄弟になれという意味だ」
「け、け、結婚なんて……。……わ、わかってたわそんな事。私は天才なのよ？」

顔を赤らめ俯いていた表情が一転、怒りと羞恥の表情へ切り替わった。

「その割には解ってなさそうだったがな。まあ、随分と愉しませてもらった。くくく」
「〜〜〜〜〜〜！」

弄って遊んでやがる。
凄く楽しそうな表情で生き生きしてる。
マサキ、やっぱり子供好きなんじゃないのか？

「……まあ、家族になってあげてもいいわよ。どうせ…もう帰れないんだし」
「そうか。じゃあ今日からお前は俺達の家族だ」
「じゃあ、私のお姉ちゃんになるんだね。よろしく、お姉ちゃん」
「…え…と、その……よろしく…」

これで俺達の家族は４人
母親はいないがまあ何とかやっていけるだろう。

「ここに人間が入る事になるとはな……俺の名は木原雅貴。マサトと美玖の父だ」
「俺の名は秋津雅人。マサキのことはダディと呼ぶといい」
「マサト、貴様ァ……！」
「どうしたダディ」
「ま、マサト君、駄目だよ……っぷ…くく。え…と、私は氷室美玖。よろしくねお姉ちゃん！」
「ぁ……ふふっ……うん！」

必死に泣くのを堪えていたガキだが、美玖の自己紹介が終わった時、その瞳から涙がとめどなく溢れてきた。
本当に寂しかったのだろう。
誰からも愛されず、愛を知らず…それを与えてくれる家族すらいなかったこの少女は。

家族とは本当にいいものなのだ……
俺は今でも弟の事が心配だ。

俺はあいつに殺されたのだがそれを仕組んだのは神だった。
俺を殺したのが自分である事に耐えられると思えない。
自傷行為をしてなければいいのだが……

「わたしの……名前は……アリサ。アリサ・ローウェルよ……」
「ああ、よろしくな」
「ふん……あまり馴れ合うつもりはないのだがな……」
「ねえお姉ちゃん、後で一緒に遊ぼうよ」

マサキは言葉とは裏腹に嬉しそうな表情だ。
美玖は姉ができたとはしゃいでいる。
2人とも、感情に乏しかったのでこういう反応をするようになったことは驚く。
美玖は最近漸く楽しみを得て、喜怒哀楽の感情が豊かになってきたのだ。

こうやって少しずつ、少しずつ感情を芽生えさせる。
これが家族計画の目的でもある。

人間・アリサが家族の一員になった。
この事で一体家族にどんな影響を家族に及ぼすのだろうか……

新たな家族（後書き）

茶髪のイギリス人アリサ・ローウェル。１０歳。死んでないのでまだ悟りを開いていない。そのため原作よりも若干明るい。

あの性格は元々の基本は変わってないと思うのですがやはり死に方があれだったのでそうなったのではないかと思い、書いていたらなにやら変なキャラになってしまいました。

ツンデレではありません。

ツンデレ枠は冥王様１人で充分です

アリサ・○×△□（前書き）

なんというか、こう。
ローウェル生存における修正や、転生者の行動の影響とマサキがはっちゃけたこと（『龍』の情報をハッキングして流出させて追い込んだ）による偶然が重なって起こる出来事。を意識しました。

※性描写に注意です。

アリサ・〇×△□

新たな家族、アリサ・ローウェル。
俺達の家族になったため、アリサ・L・木原となる。

外国人の名前に日本人の名前がつくと途端に格好悪く聞こえる気がする。
ただ、これはただの悪口の上、言うと間違いなく怒られるので黙っている。

1つ気になるのだがどうして皆秋津の性を名乗らないのだろうか。
俺だけ除者にされた気分になってしまうのだ。

まあ、それはいいとして。
突然マサキから告げられた引越しの宣言によって色々な準備をする必要が出来た。

なので忘れないうちに恭也には引っ越すことを伝えておくことにした。

「何？引越しだと？……マサト、もう3年生だぞ。こんな中途半端な時期にどうして……？」

たしかにもう既に受験モードに入りつつあるこの時期に引越しをするのは不自然かもしれない。

「お父さんの仕事の関係でね。引っ越さないといけなくなったんだ。卒業するまでは何とかしてここに登校するけど、高町と同じ高校には行けないだろうな」

『龍』に目を付けられたから逃げるという理由だから仕事の関係というのは嘘ではない。
それに管理外世界で暮らすのだ。
次元連結システムを使えるので同じ高校に行けると思うのだが、私の家が地球に存在しないので家庭訪問などができず手続き自体出来ないだろう。
まあ、俺達の戸籍のように偽造すれば問題ないのだろうが……
「そうか……。ならお前はなのはとあまり遊んでやれないということか？遠くに行ってしまうのなら帰るのが遅くなってしまうだろうし……」

それならば次元連結システムで行き来が一瞬で終わるので問題は無い。
だが、管理外世界にいる魔法生物が襲い掛かってくる可能性がある。
それから身を護るための武器を、デバイスを作らなければならないのだ。

マサキと2人で作り上げるデバイス
もう既に1つ1つのコンセプトは考えてある。
残念ながら美玖のデバイスは無いのだが……
まあ美玖にはマサキの作った劣化次元連結システムのバリアがある。
そうそう怪我をすることは無い。

このデバイス、出来上がるのにかなり時間がかかるのだ。
全て完成させるのに大体後2～3年程かかると予想している。
なので出来上がるまでは俺が家にいなければならないのだ。

魔法や危険に関わることをぼかして恭也にそのことを言うと心配してくれた。

「マサト……そうか、解った。体に気をつけろよ」

「うん、わかってる。恭也こそ、足壊してるんだから無理しないでね」

そう、こいつは隠しているが膝が故障している。

おそらく、無茶な鍛錬のし過ぎが原因だろう。

だがその程度で恭也の戦闘力が低くなる訳ではない。

いや、確かに以前と比べてガクッと落ち込んでいるのだがそれでも恭也は強い。

「！！……気付いていたのか」

気付かれないとでも思っていたのだろうか。

一つ言いたいことがあるならば……

「友達、だろ？なにか隠そうとしてることくらい見抜けるっての」

「そうか……。ふふっ、案外嬉しいものだな。」

『親友』なめんな、だ。

「マサト、いつでも遊びに来い。なのはが寂しがるからな。悔しいがなのははお前に一番なついている」

そういえばそうだった。

美玖は折角出来た友達と会うことが難しくなる。

「解ってる。美玖も寂しがっちゃうからね」

「じゃあな、マサト」
「うん。じゃあ、また学校で」

話を終わらせて次元連結システムを使おうと人のいない場所に行く。

「いやぁあああああ！！！」

ここならば、と近づいた廃倉庫で悲鳴が聞こえた。

「触るな！変態！」

中では金髪のなのはぐらいの子供が男達に捕まっていた。

「へへへ、誰も来る訳ないだろ？俺達『龍』を恐れてヤクザたちですらここには来ないんだからなぁ」
「下っ端の俺達ですら名前だすだけでビビるしな」
「ま、そういうこった。せいぜいいい金になってくれや、お嬢ちゃん？」

この男達はどうやら『龍』の構成員らしい。
そういえば『龍』の中でも性犯罪者がこの町にいると聞いた覚えがある。
そのせいで引越しすることになったのだから。

「たすけてぇ！ぱぱぁ～！！」

「はいはいそうでちゅね～パパに助けてもらいましょうね～」
「身代金はどのくらい出すんだろうなぁ？」
「娘の値段はお前が付けろ（キリっ。ってーの？ぎゃはははは！」

なかなか愉快なことをしていた。
『龍』の連中は金目当てであの子を誘拐したようだが……

「はぁはぁ、いいねぇ。ぞくぞくするよ。お、俺興奮してきた。な、なぁもう随分とシてないしよぉ、別にヤっちまってもいいよな？」
「おいおい、何興奮してるんだよ。5、6歳だろ？…でも、まあいいか。キツい方が気持ち良いからな」
「お、いいね。じゃあ俺もヤるわ」

金髪の幼女は意味をわかっていないようだがあいつらはある意味予想通りの行動に出た。
まさかとは思ったがまさかこいつらこんなガキに興奮するとは……

「ひっ、な、なに？こ、来ないで！」
「くくく、なぁに、身代金が来るまでお嬢ちゃんと愉しもうと思ってな」
「“お嬢ちゃんで”が正しいけどな」
「どっちでもいいさ。それよりさっさとヤろうぜ。いつ来るかわかんねえしよ」
「それもそうだな」

おお、あのガキはようやく何か嫌な事をされるのに気がついたようだ。

「い、いやぁあああああああ！！！やめてぇ！！」
「ひひひ、叫べ叫べ。良いねぇ叫び声は。さいっこうだねぇ」

「くくく、お前変態だな。おい、ちょっと手押さえてろ」
「お前もだろ？ほいほい、よしきた」
「いやぁああ！！！」
「脱がせ脱がせ」
「おいこらっ暴れるなっ！パンツが脱がせにくいだろうが！！」
「いやぁああああ！！やめて！！！やめてよ！！！！」
「お、脱げた脱げた」
「ひゅー。やっぱ子供はいいなぁ。つるつるだぜ」
「おいおい、お前女なら婆以外なんでもいいんだろ？」
「あ、ばれた？ひゃひゃひゃひゃひゃ」
「助けてぇえ！！ぱぱぁあ！！」
「まだきてませんよー。もうちょっと時間かかるみたいだからな」
「さっさとシようぜ。なあにすぐ終わるさ。３分ぐらい？」
「ははははは、お前どんだけ早いんだよ！」
「カップ麺作れるぜ！」
「「「ぎゃはははははは」」」

男達は幼女を剥いた後、すぐさまズボンを下ろし……

……まてぃ。
こんなＲ１８なことをして許されるとでも思っているのだろうか。

「いやぁああ！！！だれかぁああ！！！！！」
「だーかーらー。誰も来ないって」
「諦めなよ。それより俺はお口で……」
「じゃあ、俺は手からかな」
「んじゃ俺髪ね」
「髪かよ」
「最後のお楽しみは誰からイク？」
「一番最後までイかなかったやつだろ」

「よっし。じゃあ早速……」
「誰か助けてぇえ！！！！！」
「誰も来ないっていい加減しつこいなぁ」
男の一人が幼女の頬を張った。
幼女の顔に絶望と恐怖の色が見える。

……よし、そろそろ助けるか。
あれ？俺今マサキと同じことしてる？
まあいいか。

顔は隠しておくとしよう。
「変……身。仮面ライダーブラック」

男達は女の子に手を伸ばしている。
こちらには気付いてないようだ。

「そこまでにしておけ」
「あん？……は？なんだテメエは」
「変な格好しやがって……変態か！？」
「下半身丸出しで言う台詞じゃねえな、それ」
「違ぇねえ！！」

ぎゃはははと笑う男達。

ガキは恐怖と絶望、それに希望と安堵の表情が混じった表情でこちらを見ている。
どうやったらそんな表情が出来るのかよくわからないがそんな表情だ。
ここで俺がやられた振りをして更にどん底に落としてやろうかな

とも思ったが、マサキはここで素直に助けたといっていた。
……つくづく似ているな。俺とあいつは。
いや、ほぼ同じ存在か。
クローンだしな。

「とりあえず、見られたからには殺さないとな」
「っち、俺の楽しみ邪魔しやがって」
「おい、野郎共！！こいつぶっ殺せ！！」

男達の仲間がどこからとも無く現れ俺を取り囲んだ。

「悪く思うなよ？」
「ま、運が悪かったと思って死ねよ」
「……やれ」

男の合図で一斉に引き金を引く。
だが、囲んだ状態で打つと仲間に当たるとは考えなかったのだろうか。
私は弾をすべてかわす。
するとやはり仲間に当たった様だ。

「て、てめえ！よくも王（わん）を！！！」
「今のは同士討ちだろう馬鹿どもめ。俺は何もしていない」
「死ねっ！！！！」

男達は接近戦に切り替え、薙刀や、日本刀を取り出してきた。
ブラックのパンチ力ですら手加減をしない限り死んでしまうのでかなり神経を使う。

男Ａが薙刀を振るう。…それをパンチで圧し折る。
男Ｂが刀で斬りかかる。…キックで圧し折る。
男Ｃが殴りかかった。…俺はあえて受け、近くにいた男Ｄの頭を掴み男にぶつけた。
男Ｅが蹴りを繰り出した。…俺はそれを掴んで投げ飛ばす。

ただそれだけ。
それだけのことで男達は戦闘不能になってしまった。
残ったのは金髪幼女とうめく男達。
それとこの俺、仮面ライダーブラックであった。

ガキのほうを見るとかなり警戒をしているようだった。
近づこうとすると後退り涙目でこちらをみる。

俺は変身を解きガキに更に近づいた。

「！？……！……ぃや……助け……」
「服を着ろガキ。風邪ひくぞ」
「……ぇ？……ぁ…ぅ…」

男達に引き裂かれ、ほぼ裸だったガキに俺が着ていた『マサキの上着』をかけてやった。
……意趣返しってわけではないぞ？
ただ、偶然俺の着ていた服がマサキのものだっただけで、偶々このガキの服が使い物にならなくなっていたから使っただけだ。
アリサに俺の服を半分以上マサキの横流しによって奪われたことを怒ってなどいない。
たぶん。

ガキは俺が何もしないとわかると緊張が解けたのか、すぐに寝てしまった。
とりあえず警察を呼び、安全が確保されるまではこのガキのお守りをしておく。
男達によれば身代金を届けに誰かが来るそうだが……

――――来たか。
微かに人の気配がする。
なかなかの達人のようだ。
恐らくこのガキの親が雇ったものか、『龍』の人間か……
どちらか見極めなければならない。

顔を隠すために男達を縛り上げた後、男が持っていた布で顔をグルグルに巻きつけ顔を隠す。
前が見難いが問題ない。

「……動くな。……貴様、何者だ。ここで何をしている？」

私に向かってそう問いかけてきた男の声を私は知っていた。

アリサ・○×△□（後書き）

∵「誰だお前は！！」

∴「お前達に名乗る名はない！トォ！！」

サバイバルなのに全然サバイバルっぽくない。
あと、原作に全然入らない。

私的には何年か飛ばして、その間にこんなことがあった～とかいう後付設定嫌いなんでやりたくないです。
やるなら最初からそういう伏線張っておいて後の過去編で回収みたいな感じが良いかな。
文章力がないから少しずつ飛ばして、途中経過の描写を入れつつ原作まで行きます。
早くいかないと５０話までに終わらないかも知れないと心配。

今度、フェイトのアンケートとります。
ヒロインではありますが家族かそうではないかで＜マサキが＞変わります。　プレシアさん　（を調教）　的な意味で。

アルハザードの秘術って便利ですよね。
だって延命だろうが若返りだろうがやりたい放題だし。
でも、破壊系統の魔法は他作品にもあまり見かけないですね。
何でだろ。

原作の若槻魔沙樹を出そうか考えましたが、間違いなくＲ１８指定です。本当にありがとうございました。
ノクターンでもないのに性描写が主な小説書いてる人は垢ＢＡＮ

されたりしないのでしょうか。
いや、されないんでしょうけど。
どの程度なら大丈夫かわからないので色々試そうか悩んでます。

その時奇跡が（ｒｙ（前書き）

奇跡、起こります。
吸血鬼最強はカーズ。
……そう思ってた時期がありました。

その時奇跡が（ｒｙ

あれ～？さっき別れてきたばっかなのになんでこいつが？というか何してんのお前。

「もう一度いう。何者だ。ここで何をしていた」

……こいつは確実に『龍』ではないと思う。
たぶんこのガキの親に雇われたんだろう。ほんとに何してんだよ。
とりあえずガキが無事かどうか見せるために見える位置に持ってくる。

「――――！！……身代金ならばここにある。その子を解放しろ」

あれ？勘違いされた？
身代金なんて要らないので必要ないというジェスチャーを送る

「！！待て！中身はちゃんと入っている！確認しろ！」

何これ。なんで俺がこのガキ誘拐したみたいになってんの？
要らないので突っ返す。と、同時にガキを抱きかかえる。

「……その子をどうするつもりだ」

えぇ～。なんだかわからんが物凄い罪悪感がする。
ガキをあいつに渡す。
寝ているのであいつにもたれかかる形だ。

「！……どういうことだ？金が目的ではないのか？」

めんどくさいので帰れとジェスチャー。
「……っく。……何のつもりか知らんが、一刻も早く依頼人のもとへ行かねばならんのでな。」
そういってあいつは走り去ってしまった。
『御神の剣士』ってのはあんなこともしてんのか……
ようやく誰もいなくなり、警察呼んで帰ろうとしたときだった。
「ちょっと待った！！お前だな？アビスの野郎を殺したのは」
突然小学生くらいの子供が俺に話しかけてきた。
お前誰だよ、図々しい。アビスって誰だ。
「俺は巧木百夜、お前と同じ転生者だ」
あ、思い出した。
アビスってあいつか。
「……で？」
「おいおい、同じ転生者同士仲良くやろうぜ？」
「嫌だ」
「ふぅ、やれやれ。これだから中二病は……」
「何の用だ」
「ああ、そうだったそうだった。いや～お前がアビスを消してくれたおかげでハーレム目指し易くなったからな、お礼と勧誘をしようと思ったんだ」

「勧誘？」
「お前も狙ってんだろ？男の夢だもんな！」
「……？」
「ハーレムだよ！言わせんな恥ずかしい」

狙ってねえよ。

「……それでなぜ勧誘なんだ？」
「ああ、アビスはあれで強いんだ。デバイス持ってないやつが大半の中で。だがな。それをあんたが消したんだ。アビスは俺らのグループの中だとトップだったからな、他のやつは大騒ぎだ」
「で？」
「アビスを消したあんたを俺の味方につければ他の転生者との戦いが有利になる。だろ？」
「なんで俺がお前と組まないといけない」
「決まってんだろ。ハーレム要員を原作キャラから皆選んで、被ったらバトル。勝ったやつがそのキャラをゲットできる。ちなみにアビスは5人ゲットしてたんだ。でもあんたに消されたからまたバトるんだとさ。そこであんたの出番だ。あんたが俺と組んで皆殺しにすれば二人で山分けできる。どうだ？」

馬鹿だ。ここに馬鹿がいる。
というかあいつより弱いお前に何が出来るんだ。

「前の戦いの時は俺はまだ生まれてなかったからな。でてたらアビスにくらい勝ててたさ」
「前の戦い？」
「ああ、前の時はかなりやばいやつらが潰しあってたみたいだ。ギルガメッシュとかな。ま、もう死んでるけど」

ああ、あれか。
結界張らずに戦闘してて、俺が転生者に関らないように心掛けた切欠だったな
「なのははあんたにやるけどフェイトとはやては俺が貰うけど構わないよな？」

だから運命だの疾風だの俺の知らない奴の名前を知ってて当然みたいに話すんじゃない。
それにこのガキ、俺のことをロリコンだと思ってないか？
なんで俺がなのはを貰わないといけないんだ。

「なあ、おい。返事くらいしてくれよ」
「……おい」
「んあ？」
「お前、少し勘違いしてないか？」
「何が？」
「俺はハーレムなんて狙ってない」
「へえ、じゃあ皆貰ってもいいのか！やったぜ！」
「それに、俺がいつお前を手伝うといった？」
「……あ？なに？やんないの？」
「当たり前だ。俺は誰の指図も受けん」
「ふ～ん。そっか。じゃあ……」
「……？」

――――死ね

「ッ！！」

危な！！

どこから刀出しやがったんだ？
つーかいきなり斬りかかってくんな。

「う～ん。アビス倒したやつがこの程度でやられるわけないか」
「なんのつもりだ」
「決まってるだろ。一番強いお前を潰せば俺が一番強い。それをあいつらに解らせれば誰も俺に逆らえない」

やっぱ馬鹿だこいつ。
疲労したとこ叩かれて死ぬのが目に浮かぶようだ。

「さあ、アビスを倒した実力見せてくれよ」

決めた。
こいつに次元連結システムは攻撃に使わない。
という訳で

「変身！」
「お、仮面ライダーだったのか。……？あれ、平成ライダーじゃない？」
「ぎりぎりで昭和ライダーだ。一つ言っておくがこの姿は一番弱い」
「舐めてやがるんだな？殺してやるよ！！」

巧木が刀で斬りかかってくる。
なんでこの身長で刀を使ってるのか気になったが使えてるならいいのだろう。
この程度ならば武器を使わなくてもいいと判断した俺は奴の攻撃を手で弾き、殴り飛ばす。

「流石アビスを消しただけあるな。なら、そろそろ本気出すぜ？」

――――散れ、千本桜

そう呟くと共に刀の刀身が消えたように見えた。

「……？……っぐ！？」

突然全身を切刻まれた。

よく見ると、刃が辺りに浮かんでいる。

光の反射によって桜の花を思い浮かばせるような光景だ。

「っは！これでどうだ。これでお前の攻撃は当たらない！」

「ふん。この程度で俺を止められると？」

この程度の攻撃に立ち止まる必要はない。

俺はダメージを無視しながら近づいていく。

「っな！……くそ、《縛道の六十一　六杖光牢》」

「！？なんだこれは！」

突然光に突き刺され、動きづらくなった。

「あ？ブリーチ知らないのか？ジャンプ読め」

「知らん」

「じゃあこいつも知らないんだろ？」

――――千本桜景厳

巧木は持っていた刀を手放した。

「武器を棄てる？どういうつもりだ？」
「ふっ、まあ見ていろ。どうせ動けないんだろう？」
刀が地面に落ちたと思ったら地面に吸い込まれるように消えていき、そこから巨大な刀身が立ち昇る。
「な！？」
「逝け！！」
その刀身は一瞬で細かく散り、巧木の手の動きに合わせて俺を襲う。
「ぐぁあああああ！！！！！！！！」
鋭い刃が俺の体を引き裂こうと何度も襲い掛かる。
「……？」
ライダーの能力マルチアイで巧木の動きを見逃さないようにすると巧木の周りには刃が近づいてないことが解った。
そのことに気付いた俺は攻撃をくらいながら巧木に近づいていく。
徐々に距離を縮め、攻撃の当たらない場所に着く。
「やはりここには攻撃が届かないようだな」
「っは。届かないんじゃなくて来させてないんだ、よ！」
巧木が手を振り上げた瞬間、背後から俺に無数の刃が斬りかかる。
「な！？」
「うお！避けんなこの野郎！」

俺が間一髪かわすと、朽木にも当たりかけたようだ。
つまり、あそこが安全な理由は自分に当たるかもしれないからか。
今の隙に巧木との距離を縮める。
俺の射程距離に入り、殴る。が、

「蒼火墜！」

蒼い炎が俺を襲う。
おそらく高エネルギーを炎に変換して打ち出しているんだろう。
俺はこれによって吹き飛ばされた。

「ざまあないな。この分じゃ、アビスはかなり弱いんだろうな。ま、そろそろ終わりにするか」

――――吭景・千本桜景厳

そういうと無数の刃は俺を取り囲み、一斉に俺をバラバラにしようと襲い掛かる。

「はっはっは！お前が死んだら金髪バーニングも吸血鬼も魔法少女もみーんな俺の物になるんだ！！」
「……っふ…」

突然俺の頭の中がクリアになる。
景色が反転し、ゆっくりとした動きになっている。
これが走馬灯って奴か？と思ったが体が勝手に動き出す。
ゆっくりになった世界で自由に動いている俺の体。
次元連結システムを使い、大気圏外に転移する。

おいおいなにやってんだよ。
次元連結システム使っちゃったよ。

そのまま振り返ると、そこには太陽が見える。
そしてその太陽光線を直に受けたキングストーンに異変が起きた。
なんとキングストーンが太陽光線のエネルギーを過度に吸収したことによって成長、進化を同時に行った。
どんどん体が作りかえられていくのがわかる。
この現象を俺は知っていた。
ナレーションが聞こえてくるようだ。
その時奇跡が起こった。だ。
あのご都合主義のような現象。
日食でなくても、変身機能が破壊されていなくても進化することは出来たのか。
変身を終えた俺の体は再び朽木のいる所に転移、背後をとった。

「いない！？どこに行った！！」
「……リボルケイン…」

俺はリボルケインを生成、後ろから斬りかかった。

「ぐぁあああ！！！……て、てめえ！いつの間に！」
「……茶番は終わりだ……来い、サタンサーベル」
「死ねぇえええ！！！」

――――終景・白帝剣

巧木は散らばっていた無数の刃を一本の刀にと変えたが、俺には関係ない。
左手にサタンサーベルを召喚し、リボルケインと一緒に構える。

「止めだぁああ！！！！」
「……愚かな…」
なんだか、気分が良い。
俺は斬りかかってきた巧木の攻撃をかわし、サタンサーベルで斬る。
「ぎゃぁあああああ！！！！！痛い！！！！痛いぃ！！！！！」
「……泣け、喚け！……そして……死ぬがいい！！」
俺は巧木に近づいたが、突然手をこちらに向けて蒼い炎を打つ。
「っく、蒼火墜！！！」
「くくく、無駄無駄無駄ァ……！」
だが、リボルケインがそのエネルギーを吸収し、反射する。
「ぎゃぁあああ！！！！！！！！」
「死ね……」
炎に焼かれ、悶える奴にリボルケインを突き刺し、抜く所で距離を取る。
「あ、ああ、あああ、嫌だ、嫌だぁあああ！！！！！」
体内でリボルケインの高エネルギーを放出され、巧木の体は消滅していく。
「あ、あああああああ、がぁあああああああああ！！！！！！

！！！！」

「くくくく、あはははは！！！あーっはっはっはっはっは！！！！！」

何故だろう、今なら世界征服もできる気がする。しないけど。
だが俺の性格が何故かオリジナルに近づいてしまった気がする。
あのテンションの上がり方は俺のではない。
オリジナルの方に少し引っ張られているんだろう。
まあそんなことを気にしてもしょうがないが……。

「……はぁ、少し舐めすぎたか」

今回の戦いで、ここまで追い詰められてたのは次元連結システムを使わなかったからだろう。
だが、近接戦闘の経験をしなければいけないとは思うので結果オーライだ。

たぶん。

その時奇跡が（ｒｙ（後書き）

ブラックの話ってうろ覚えなんですよね。
何しろ観たのは子供の時のことですから。
唯一覚えてたのはロボのリボルテックシューター。

白夜は全然知りません。
ブリーチもあまり知りません。
けど、昔見て強くてかっこいいイメージがあったのでこうしました。
最後の一番強い卍解で勝てなかった理由は転生者の体が本当の持ち主である白夜よりも弱く、小さかったからです。
同じ身体能力と才能を得ても、本人と同じように努力しないと技量は上がらないし、大人にならないと斬魄刀なんて使いこなせない筈です。
そもそも始解すら難しい筈。
天才だからまあなんとかなったんだろうけど。

買い物にて、転生者現る（前書き）

素晴しい事に戦闘回ではありません。
時系列的にさっきまで戦闘していたことになっているので。
仮面ライダーブラックは後２回変身を残している……

買い物にて、転生者現る

重大な事件が起こった。

俺が上半身裸で帰宅し、部屋に入ってシャツを取ろうと箪笥見たらすべての服が消えていた。

アリサがおかえり、と小さな声で言っていた時、ぶかぶかの黒シャツと１０歳の時に使っていた俺のハーフパンツを穿いていたのを覚えている。

ここから推測出来る事といえば

……いや、推測しないでも犯人わかるじゃねえか。

あのガキ俺の服をこっそり盗んで自分の物にして着てやがる。

シャツの裾踏んでこけていたりするのだが、見ない振りをしてやっているというのに、まさか全て奪われるとは思わなかった。

アリサの分の服は俺が持ってこよう。なんて言っていた俺の父親はどこから調達しているんだろうな！

ということで買い物に行く。

ここは海鳴市の普段使っているところではなく少し遠い所。

名前はたしか……風芽丘だったかな？

まあ、ここに来ている理由はついでに食材の調達をしようと思ったからだ。

こっちのスーパーのほうが１０円安いからこっちで買ってきてと美玖に命令をされた。

最近美玖が家計簿つけそうなレベルで家庭的になってきていて嬉しい反面、俺は子供の見た目で大人なことを言う美玖を見ていると寂しくなる。

３枚１０００円の黒シャツを１０組ほど購入してからスーパーへと向かった。

スーパーでカレーの食材と適当に野菜と肉を買い、レジに行こうとすると茶髪のガキが俺の前に立ちはだかり邪魔をしてきた。

「お前、転生者だな。話があるついて来い」

……ま　た　お　ま　え　ら　か

いい加減にして欲しい。

転生者とはもう戦いたくない。

昼間、次元連結システムで殺さないっていう舐めプレイしたせいで全身に切り傷を負ってしまったんだ。

太陽光を浴びるとすぐに治癒されるが痛いものは痛い。

とりあえず無視してレジに並ぶ。

「おい、聞いてるのか。話があると言っている」

あーあーきこえなーい

「おい！」

「こら、奏。何してるの。ごめんなさいねお兄さん。……ほら、こっち来なさい」

親と来ていたようでガキはそのままどこかに連れて行かれた。

「おーぼーえーてーろー！」
「こら。駄目でしょ」
……なんだったんだ？

買い物を終えて近くを歩いていると再びあのガキと会った。
「！おい、お前」
「どうしたお嬢ちゃん。お母さんはどうした？」
「……馬鹿にして…話がある」
「……はぁ。なんだ？」
「お前は、はやてを狙っているのか？」
……やっぱりこの手の話か。
「というかはやてって誰？」
「……？知らない？お前、転生者じゃないのか？」
「はぁ？あのな、嬢ちゃん。アニメの見すぎだぞ？」
「……！～～～～～」

ふ、これが俺の考え付いた対転生者用の対応術。
大抵の奴は問答無用で襲い掛かってくるからあまり使う機会がなかったのだが……
「……馬鹿にするな。お前、木原マサキだろ？」
「……？何であいつの名前を知っているんだ？」
「前世で僕の兄ちゃんが観てたんだ」
「前世？あ～はいはい前世ね。知ってる知ってる」

「真面目に答えろ！」
「切れんなよ。カルシウム足りてないんじゃないのか？」
こいつ、他の転生者と違って攻撃的じゃないから楽だ。
「た、足りてる！！」
「牛乳飲んでるのか？」
牛乳。
それは苦手な人も結構いる飲み物。
弟は大嫌いだが俺はそうでもなかった。
でも飲むと腹を壊す。
「う……あ、あんな不味いもの飲めるか！」
「こら、駄目じゃないか。好き嫌いしちゃ大きくなれないぞ」
「ご、ごめんなさ……う、五月蝿いっ、お前には関係ない！」
やばい、こいつで遊ぶの楽しい。
「……もういい。はやての事、知らないんだろ？」
「そういってるじゃないか」
あいつらのいうところの原作キャラってことか。
「だったら忠告だ。もし、はやてに強引な手段で迫ったら許さない」
何で俺がそんなことをしなくちゃならんのだ。
「どうしてそのはやてって子を気にしてるんだ？」
「……決まってるだろう？姉妹だからだ。妹の心配するのは理屈じ

ゃない」

……おー。

前世の俺が弟に言ってた言葉だ。

恥ずかしい。

ここに来て黒歴史を掘り起こされるとは思わなかった。

最近は記憶も薄れてきて思い出せないというのに……

「僕は、転生者からはやてを守る。絶対に……」

「……そうか」

きっとこの思いは尊いのだろう。

このガキが転生者から妹を護りたいというのは、もし恭也が転生者だったならそうしていただろうし、当然のことだと思う。

だからといって俺が転生者に関りたくないのは変わらないが……

「さて嬢ちゃん。親の所に戻りな。心配してると思うぞ」

「余計なお世話、だ」

「それと俺の名は秋津雅人だ。木原ではない」

「どちらも似たようなものじゃないか……」

「こら、ガキ。俺が名乗ったんだ、お前も名乗れ」

「あ、ごめんなさ……んんっ。僕は八神奏。転生者ならどういうことかわかるだろう？」

「わからん」

「……原作知識ないのかな？」

聞こえてる聞こえてる。

皆ボソッと言ってるけど俺には普通に聞こえるからな？

それにしても原作キャラの兄妹に転生……か

それってあいつらに真っ先に狙われるんじゃないのか？

……少し、保険をつけておくか。
こいつはあいつらと違ってまともだからな。

「あ、奏ー！帰るわよー！早くこっちきなさーい」

親がやってきてガキを連れて行く。
妹と思われるさっきのガキが更に小さくなったようなガキが一緒だ。

「姉ちゃん。あの人誰なん？」
「……知り合いだよ」
「あんな大人の人と知り合いなんかー、姉ちゃん美人やから狙われたりしてへんのやろかー」
「大丈夫だよ。僕は強いんだぞー？」
「あははは、腕相撲で私に勝ったことあらへんやないかー」
「……う、それは…」
「牛乳のまれへんってお母さんに泣きついてたりも……」
「は、はやて、それ以上は……」

あのガキがはやてらしい。
……なんで皆は俺をロリコンに仕立て上げるのだろうか。
俺はガキに興味はないのに……
せいぜい、オリジナルのマサキが家族といえば子供だ。とかいって守護騎士にヴィータを造ったぐらいだ。
そういえば俺以外の転生者のほとんどがロリコンなのか？
基本あいつら子供しか狙ってないような気がするんだが……

買い物にて、転生者現る（後書き）

伏線です。
回収は確実にします。

フラグの立て方が雑になってきてる気がする。
視点変更で書くのはW主人公の時意外は嫌いだから主人公以外の言葉に出さない感情を書くのは難しいです。

ちなみにフラグが現時点で立っているのはアリサ×2と美玖だけです

美玖→頼りにしている兄、よく解らないけど好き
アリサ→初めて出来た家族、気になる
なのは→大好きな『友達』※ここ重要
アリサ（バーニング）→上半身裸で助けてくれた人、探している

子供って意外と簡単にキスするんです。友達に。
貞操観念が全くない。というよりは情操教育が完全ではないからでしょうか。
でも、嫌な予感がするとかの危険は感じ取りますよね。
ロリコンとかペドフェリアとかが目の前にいるとなんとなく警戒してる。

ちなみに私の初接吻は幼馴染の『男の子』です。※俺は男性です。
舌ってどんな味がするんだろ？って言ったら、確かめよっか。と返してきてそのままやっちゃいました。舐めるだけではなくがっつりいってしまってディープな方です。ちなみに舌の味はチューブタイプの糊の味でした。

子供の頃の味覚ですのであまり参考になりませんが。
私の黒歴史です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8623x/

転生者サバイバル

2011年11月18日13時20分発行